ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 28 号

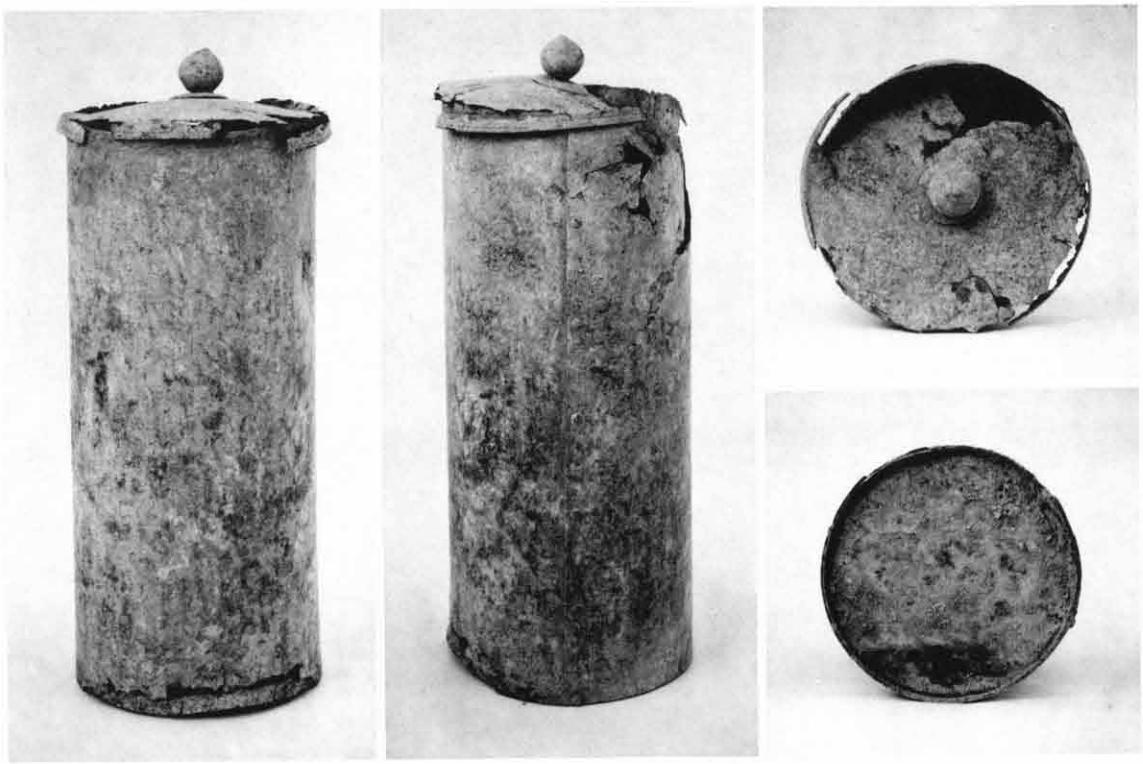
昭和63年度発掘調査予定の遺跡……奥村清一郎……1
昭和62年度京都府下埋蔵文化財の調査……辻本　和美……5
私市円山経塚の調査……鍋田　　勇……17
昭和62年度木津地区所在遺跡の調査……戸原　和人……23
—昭和62年度発掘調査略報—……34
22. 桑飼上遺跡　　25. 千代川遺跡第13次
23. 福垣北古墳群　　26. 長岡京跡右京第285次
24. 青野遺跡第13次
全伽倻解明の貴重な鍵—金海・七山洞古墳群発掘調査の成果—
……申　敬　澈（松井忠春 訳）……47
資料紹介　志高遺跡出土の大歳山式系統の土器について……三好　博喜……53
府下遺跡紹介　40. 東寺旧境内……56
長岡京跡調査だより……60
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧……64
センターの動向……65
受贈図書一覧……67

1988年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

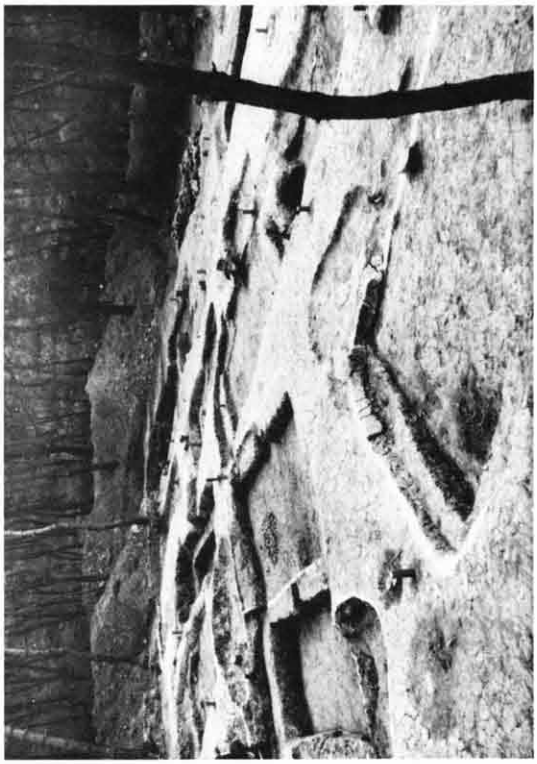
図版第１　　私市円山経塚の調査

(1)　経塚の検出状況（第３検出面，南から）

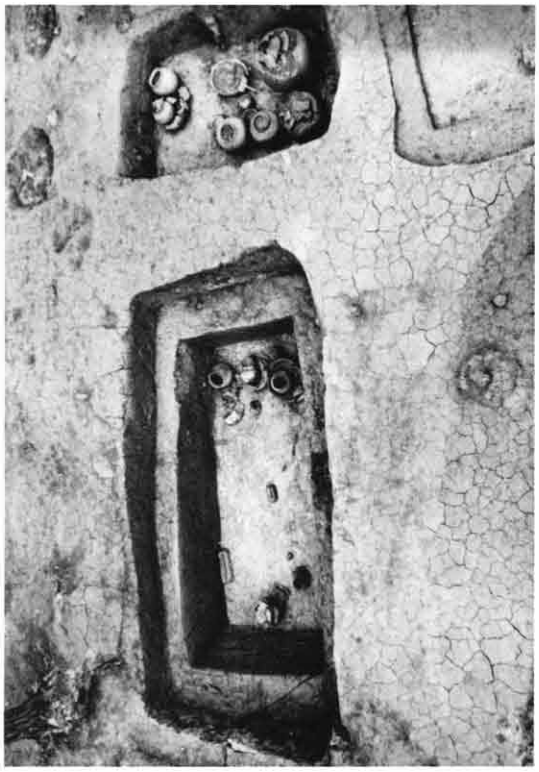


(2)　銅製経筒

図版第２　　全伽倻解明の貴重な鍵（韓国金海市七山洞古墳群）

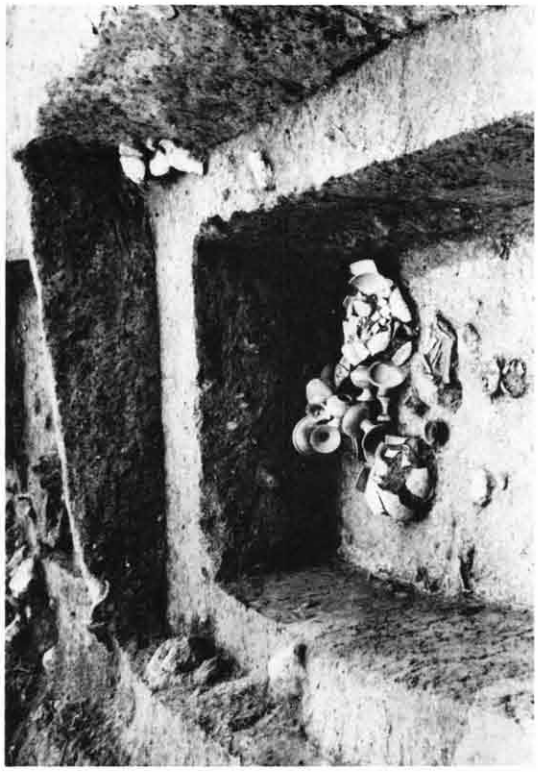


(1)　第Ⅰ区全景



(2)　第Ⅰ区１号墳全景

(3)　第Ⅰ区27号墳主槨全景



(4)　第Ⅰ区２号墳主槨遺物出土状況

図版第３　志高遺跡出土の大歳山式系統の土器について

(1)　大歳山式土器

(2)　大歳山式土器

昭和63年度発掘調査予定の遺跡

奥　村　清一郎

昭和63年度は，当調査研究センター発足後，８年めにあたる。本年度は京都国体の開催年度にあたり，それに直接関係する事前調査は，昭和62年度で終息したが，事業量は年々増加する傾向にある。

今年度の発掘調査事業は，別表にしめしたとおり24件，遺跡数にして42件が予定されている。この24件のうち，２件は遺物整理・報告書作成を行うものである。残り22件のうち，半数を越す13件は前年度からの継続事業で，新規事業は８件を数える。調査原因となる公共事業は，例年同様道路の新設・改良などの道路建設事業が主流を占め，住宅団地の造成事業，農地の造成事業，工業団地の造成事業，庁舎・学校の新築および増改築事業などがこれに次いでいる。これらの業務を実施するにあたっての執行体制は，昨年同様３課６係体制で対処することとなるが，内需拡大等による公共事業の増加に伴って発掘事業量も多くなり，したがって調査員を２名増員して，事務局長以下41名で臨むこととなった。以下，今年度調査予定の遺跡についてかいつまんで紹介する。

１日光寺遺跡は，浦明遺跡の東方に展開する台地上を占める遺物散布地で，集落関係の調査成果が見込まれる。

２遠所古墳群ほかは，丹後国営農地開発事業に伴う調査で，小規模古墳群４件，城館跡・集落跡各１件の調査を行う。

３温江遺跡は，史跡蛭子山古墳の南方に広がる微高地上に位置する散布地である。弥生中期から平安時代にかけての遺構・遺物の検出が見込まれる。

４休場古墳は野田川町水戸谷にある径8m前後の小規模な円墳である。道路改良に伴う調査で，横穴式石室墳の可能性が指摘されている。

５桑飼上遺跡は，由良川南岸の自然堤防上に立地する複合集落遺跡である。昨年度に実施した試掘調査で弥生時代中期から奈良時代におよぶ各時代の遺構が検出されており，今年度は引き続き本調査および追加の試掘調査を行う。

６興遺跡ほかは，近畿自動車道舞鶴線建設に伴う調査で，今年度は，古墳４件，集落跡１件，城館跡２件，散布地３件の計10件の調査が予定されている。古墳４件のうち，１件である円山古墳は，昨年度の試掘調査で径60m・高さ10mの福知山盆地最大の円墳で，幅15m・長さ10mの造り出しをもつことが確かめられている。

7淵垣城跡ほかは，工業団地の造成に伴い，淵垣城跡と岡安城跡の城館跡2件の調査を行うものである。

8仏南寺城跡は，綾部市里町にある平山城で，道路改良に伴い一部の調査を行う。

9青野西遺跡は，由良川南岸の自然堤防上に位置する弥生後期を中心とする集落跡である。広域農道の建設に伴い，約1,500m²の調査を行う予定である。

10千代川遺跡ほかは，国道9号バイパス建設に伴い，丹波国府推定地を含む亀岡市千代

昭和63年度　発掘調査予定遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	原因工事	調査対象面積	調査予定期間	備考
1	日光寺遺跡	散布地	久美浜町浦明	道路建設	1,500m²	6～9月	新規
2	遠所古墳群ほか	古墳ほか	久美浜町・弥栄町ほか	国営農場	3,000m²	4～11月	継続
3	温江遺跡	散布地	加悦町明石	道路建設	2,000m²	9～12月	新規
4	休場古墳	古墳	野田川町水戸谷	道路建設	100m²	5～6月	新規
5	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市桑飼上	河川改修	4,000m²	4～11月	継続
6	興遺跡ほか	散布地ほか	福知山市・綾部市	道路建設	10,000m²	4～2月	継続
7	淵垣城跡ほか	城跡	綾部市淵垣町ほか	工業団地	900m²	5～7月	継続
8	仏南寺城跡	城跡	綾部市里町	道路建設	500m²	9～10月	新規
9	青野西遺跡	集落跡	綾部市青野	道路建設	1,500m²	4～7月	継続
10	千代川遺跡ほか	集落跡	亀岡市千代川町ほか	道路建設	6,000m²	4～1月	継続
11	平安京跡	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	1,200m²	4～6月	継続
12	長岡宮跡	都城跡	向日市鶏冠井町	庁舎建設	580m²	4～6月	継続
13	長岡京跡ほか	都城跡	向日市上植野町	校舎改築	700m²	7～9月	新規
14	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	道路建設	2,700m²	5～11月	継続
15	長岡京跡	都城跡	長岡京市粟生	道路建設	320m²	4～5月	継続
16	長岡京跡ほか	都城跡	長岡京市馬場ほか	道路建設	3,000m²	4～11月	新規
17	長岡京跡	都城跡	向日市寺戸町	道路改良	200m²	7月	新規
18	樋の口遺跡ほか	散布地ほか	田辺町・精華町	道路建設	1,000m²	4～7月	継続
19	恭仁京跡・八後遺跡	都城跡	木津町八後	道路建設	260m²	7～8月	継続
20	上人ケ平遺跡	集落跡ほか	木津町市坂	団地造成	7,000m²	4～12月	継続
21	木津遺跡	集落跡	木津町木津	庁舎建設	300m²	7～8月	新規
22	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡	庁舎建設	500m²	9～10月	新規
23	志高遺跡	集落跡	舞鶴市志高	—		4～3月	継続整理報告
24	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠町	—		4～3月	継続整理報告

川遺跡の調査と，古墳２基(園部町善願寺古墳群)の調査を予定している。

11平安京跡は，京都府庁内の庁舎新築に伴うもので，昨年度から引き続き調査を進めている。平安時代以降現代に至る各時代の遺構・遺物の検出が見込まれている。

12長岡宮跡の調査は，長岡宮大極殿の西方，朝堂院西方官衙地区に相当する地点で行われるもので，長岡宮に関係する遺構・遺物のほか，下層遺構としての古墳・竪穴式住居跡なども検出される可能性がある。

13～16は，長岡京跡に関する調査である。13の調査は，校舎建設(府立向陽高校)に伴う

昭和63年度　発掘調査予定遺跡位置図

もので，左京三条二坊付近の条坊関係遺構の検出に期待が寄せられている。14は，府道外環状線の建設に伴うもので，右京二条二坊関係の調査成果が期待される。15は，右京二条四坊で行われるもので，府道改良に伴い調査を行う。16は，名神高速道路の拡幅に伴う調査で，左京域の条坊推定位置付近を主たる対象に，南北に狭長なトレンチ調査を行う。長岡京条坊制の解明に寄与する貴重な調査データが得られるものと思われる。

17長岡宮跡は，道路拡幅工事に伴う調査で，向日町警察署の旧庁舎敷地内において行われる。

18樋の口遺跡ほかは，京奈バイパス建設に伴い，城館跡１件(田辺町小田垣内遺跡)，散布地１件(精華町樋の口遺跡)の調査を行う。

19恭仁京跡・八後遺跡は，木津町内の木津川南岸の沖積地において，道路建設に伴い恭仁京右京条坊に関係する遺構の検出を主たる目的として実施するものである。

20上人ケ平遺跡ほかは，学研都市関連の宅地造成に伴う調査で，今年度は，古墳１件(木津町幣羅坂１・２号墳)，集落跡２件(上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡)，散布地１件(瀬後谷遺跡)の調査が予定されている。

21木津遺跡は，木津町の木津川南岸の平地に位置する歴史時代の集落跡で，泉津に関係する遺構・遺物の検出が期待される。

22木津川河床遺跡は，八幡市北部の平野部に位置する複合集落遺跡である。今年度は下水道事業に関連して，約500m^{2}の調査を行う。

23志高遺跡・24篠窯跡群は，整理・報告書作成等を行うものである。

以上が今年度予定されている発掘調査事業であるが，このほかに普及啓発事業の一環として，年５回の研修会と年１回の講演会，および年１回の展覧会を計画・実施する予定である。展覧会は「小さな展覧会」と題し，例年前年度の主な調査成果を公開・展示する企画で，今年度も向日市文化資料館の協力を得て，８月中～下旬に行う予定である。共同研究事業は「京都府の土師器・須恵器研究」をテーマに研究班を編成し，研究並びに資料の集成を行う予定である。刊行物としては，調査報告書・調査概報，本誌，展覧会パンフレットのほか，研究助成事業の成果物として『京都府弥生土器集成』(仮称)，昨年度実施した特別講演会の記録をまとめた『景初四年銘鏡をめぐる諸問題』(仮称)などの刊行を計画している。

以上にかかげた当調査研究センターの昭和63年度事業の実施にあたり，関係各位の御理解と御協力をここにお願い申し上げるしだいである。

(おくむら・せいいちろう＝当センター調査第１課企画係長兼資料係長)

昭和62年度京都府下埋蔵文化財の調査

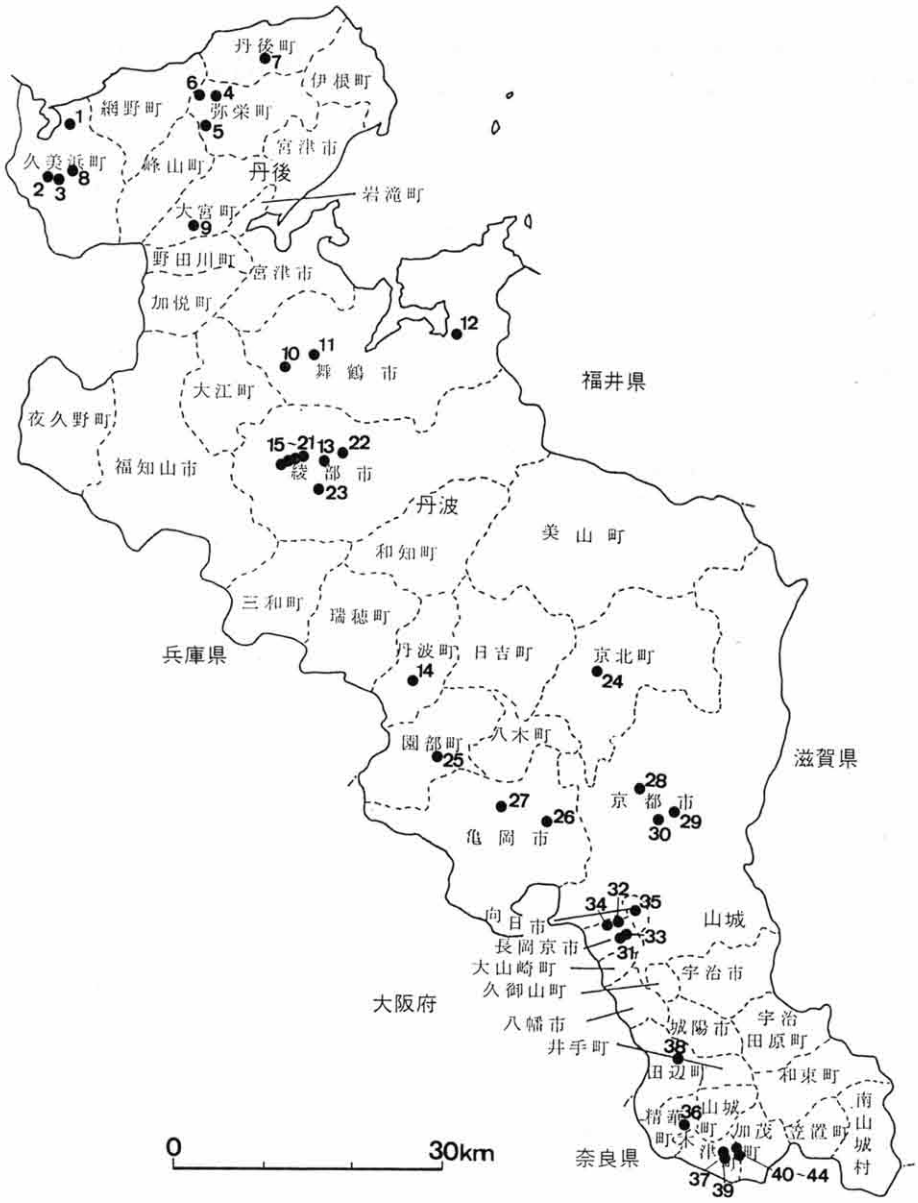
辻　本　和　美

昭和62年度の京都府下における埋蔵文化財の発掘調査は，昨年度に比べ大幅な伸びを示した。京都府教育委員会が集計した昭和62年(１月～12月)の文化財保護法第57条の２および３の規定に基づく土木工事等による発掘届出・通知件数は2,266件(対前年比30％増)を数え，また，同法第57条・同98条の２による埋蔵文化財発掘届出・通知件数は，245件(同57％増)であった。特に，京都市・乙訓地域等の都市部での急増ぶりが目立ち，その原因として内需拡大にともなう公共事業の増加や民間の宅地造成・住宅建設等の土地ブームを反映したものと考えられる。

京都府下では，当調査研究センターのほか京都府教育委員会・各市町村教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)古代學協會・京都大学埋蔵文化財研究センター・京都大学構内遺跡調査会・同志社大学校地学術調査委員会等の各機関が発掘調査を行っている。当調査研究センターでは「国・公社・公団及び京都府が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」を実施しているが，昭和62年度は各関係機関から25件の調査委託(発掘調査20件・整理５件)があった。なお，委託契約は１件であっても複数の遺跡を対象としているものがあるので，実際に発掘調査を実施した遺跡は計44か所である。参考に過去７年間の地域別遺跡調査数(付表１)の推移をみると，年々10％前後の

付表１　センター調査実施遺跡年度別件数一覧

地域＼年度	56	57	58	59	60	61	62	合計
丹後	1	1	0	0	3	8	9	22
与謝	2	1	0	1	1	0	0	5
中丹	11	10	10	10	11	9	14	75
南丹	5	10	9	6	5	3	3	41
北桑田	0	0	0	1	1	1	1	4
乙訓	8	6	8	5	5	8	5	45
山城	6	3	7	6	21	10	9	62
京都市	5	4	2	1	1	2	3	18
合計	38	35	36	30	48	41	44	272



昭和62年度　発掘調査実施遺跡位置図

伸びを示している。特に59年度以降の傾向として住宅・都市整備公団による関西・文化学術研究都市関連の木津ニュータウン造成に係る関係遺跡の調査や，翌60年度から実施している農林水産省近畿農政局の丹後国営農地開発事業に伴う発掘調査など，これまで大規模な発掘調査の少なかった丹後・山城地域での調査件数の伸びが目立つ。なお，中丹地域は調査件数においてかなりの比重を占めているが，これは日本道路公団による近畿自動車道

付表２　昭和62年度　発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	鳥取城跡	城館跡	熊野郡久美浜町浦明字鳥取	荒川　史 引原　茂治	62. 5.18 ～62. 6.24	掘立柱建物跡・溝・土坑墓
2	アバ田古墳群	古墳	熊野郡久美浜町新庄字アバ田	荒川　史	62. 7.10 ～62.11.11	円墳２基(横穴式石室)
3	アサバラ遺跡	散布地	熊野郡久美浜町新庄字アサバラ	荒川　史	62.11.10 ～63. 1.28	竪穴式住居跡・柱穴・土坑
4	稲荷・普甲古墳群	古墳	中郡弥栄町井辺字フコウ	森　正 増田　孝彦	62. 6. 1 ～62.12. 9	方墳11基(木棺直葬)
5	新ケ尾東古墳群	古墳	中郡弥栄町吉沢字半坂	増田　孝彦	62.10. 6 ～63. 1.25	木棺直葬墓２基・竪穴系横口式石室１基
6	遠所古墳群	古墳	中郡弥栄町	増田　孝彦	62. 8.18 ～62.10.23	円墳１基(竪穴系横口式石室)
7	高山古墳群	古墳	竹野郡丹後町徳光字高山	増田　孝彦 森　正	62. 4.13 ～62. 6. 2 62. 6.18 ～62. 9.19	円墳(横穴式石室)２基・金銅製双龍環頭大刀柄頭
8	橋爪遺跡第４次	集落跡	熊野郡久美浜町橋爪字須田	細川　康晴	62. 7.29 ～62. 9.12	顕著な遺構なし
9	谷内遺跡第４次	集落跡	中郡大宮町谷内	細川　康晴 肥後　弘幸	62. 5. 7 ～62. 7.24	竪穴式住居跡(古墳中期)・土坑・溝・早期縄文土器
10	桑飼上遺跡	散布地	舞鶴市桑飼上	細川　康晴 肥後　弘幸	62. 7. 6 ～63. 2.10	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡
11	シゲツ窯跡	窯跡	舞鶴市志高	肥後　弘幸	62. 9.21 ～63. 1.21	須恵器登窯(奈良時代)・土坑墓
12	泉源寺遺跡	散布地	舞鶴市泉源寺	岡崎　研一	62.10.13 ～62.12.18	横穴式石室１基・掘立柱建物跡・柵跡(中世)
13	栗ケ丘古墳群	横穴	綾部市小呂町田坂	引原　茂治	62. 7.13 ～62.10.29	横穴３基・土坑墓10基
14	蒲生遺跡	集落跡	船井郡丹波町字豊田	森　正	62.12.14 ～63. 2. 4	顕著な遺構・遺物なし
15	小貝遺跡	散布地	綾部市小貝町	黒坪　一樹	62. 9. 2 ～63. 2.16	方形周溝墓１基・柱穴・集石墓
16	私市円山古墳	古墳	綾部市私市町	鍋田　勇	62.11. 9 ～63. 3.11	造り出し付大円墳・葺石・埴輪列・経塚・銅製経筒
17	小西町田遺跡	散布地	綾部市小西町	三好　博喜	62. 5. 8 ～62.12.23	掘立柱建物跡・溝・土坑
18	三宅４号墳	古墳	綾部市豊里町	竹原　一彦	63. 1.10 ～63. 3.11	墳丘盛土状況
19	三宅遺跡	散布地	綾部市豊里町	竹原　一彦	62. 5. 7 ～63. 3.11	弥生土坑墓群・古墳周溝・石室墳・溝・掘立柱建物跡
20	福垣城館跡	城館跡	綾部市豊里町	黒坪　一樹	62. 1. 8 ～63. 3.11	堀切り・横堀・曲輪・礎石建物
21	福垣北古墳群	古墳	綾部市豊里町	石井　清司	62.11. 4 ～63. 3.11	木棺直葬墳４基・初期須恵器・鉄器・埴輪

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
22	平山城館跡	城館跡	綾部市七百石町	鍋田　勇	62. 4.14 ～62. 8.27	礎石建物跡・柵跡・土坑・石組状遺構・竪掘14本
23	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町字吉美前	引原　茂治	62.10.19 ～63. 2.25	竪穴式住居跡1基・溝・土坑・旧河道
24	上中遺跡第5次	集落跡	北桑田郡京北町下弓削	岡崎　研一	62. 8. 3 ～62.10. 5	竪穴式住居跡1基・土坑・柱穴(古墳時代前期)・火葬墓(奈良時代)
25	園部城跡第2次	城跡	船井郡園部町字小桜	鵜島　三寿	62.10. 2 ～62.11.19	石組遺構・土坑・井戸
26	亀山城跡第2次	城跡	亀岡市北古世町	森下　衛	62. 8. 3 ～62. 9.28	竪穴式住居跡2基(古墳時代後期)・掘立柱建物跡(奈良時代)・溝・土坑
27	千代川遺跡第13次	官衙跡	亀岡市千代川町字北ノ庄	鵜島　三寿 森下　衛	62. 5.18 ～63. 3.10	自然流路跡(古墳時代前期)・掘立柱建物跡・溝・井戸(奈良～鎌倉)
28	平安京跡・右京一条三坊九町	都城跡	京都市北区大将軍坂田町	石井　清司	62. 7.20 ～62. 9.29	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝
29	平安京跡・左京北辺三坊五町	都城跡	京都市上京区烏丸通中立売通上ル龍前町590-1	伊野　近富 石井　清司	62. 4. 2 ～62. 6. 6	井戸・地下式石組・掘立柱建物跡・石銙帯・金箔瓦
30	平安京跡・左京近衛大路西洞院大路辻	都城跡	京都市上京区下立売通り新町西入ル藪ノ内町	伊野　近富 岩松　保	63. 1. 5 ～63. 3.17	63年度継続調査
31	長岡京跡右京第281次	都城跡	長岡京市友岡一丁目1-1	石尾　政信	62.10. 9 ～62.11. 6	顕著な遺構なし
32	長岡京跡右京第285次	都城跡	長岡京市今里更ノ町・井ノ内	石尾　政信	62.11.12 ～63. 3. 5	方形周溝墓・道路側溝・掘立柱建物跡・木簡・墨書土器
33	長岡京跡右京第266次	都城跡	長岡京市開田三丁目	竹井　治雄	62. 6. 8 ～62. 7.23	前方後円墳周濠・埴輪(円筒・形象)
34	長岡京跡右京第277次	都城跡	長岡京市粟生	竹井　治雄	62. 9. 9 ～63. 1.22	竪穴式住居跡1基
35	長岡宮跡第205次	都城跡	向日市鶏冠井町大極殿73-1	竹井　治雄	63. 2.12 ～63. 3.15	63年度継続調査
36	南稲八妻城跡	城館跡	相楽郡精華町南稲八妻	黒坪　一樹	62. 5.14 ～62. 7.15	顕著な遺構なし
37	恭仁京跡・八後遺跡	都城跡	相楽郡木津町八後・宮の内	岩松　保	62. 7.15 ～62.11. 5	道路状遺構・溝・轍
38	興戸遺跡	集落跡	綴喜郡田辺町興戸犬伏5-3	伊賀　高弘	62. 8.18 ～62.10.13	土坑(古墳前期)
39	八ケ坪遺跡第3次	散布地	相楽郡木津町相楽字八ケ坪	小池　寛	62.11. 9 ～62.12.23	柱穴・溝
40	上人ケ平遺跡	集落跡	相楽郡木津町市坂字上人ケ平	小池　寛 伊賀　高弘	62. 4.17 ～62.11.30	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・古墳・合口甕棺墓
41	瓦谷遺跡	集落跡	相楽郡木津町市坂字瓦谷	伊賀　高弘	62.10.14 ～63. 2.25	旧流路・奈良時代井戸
42	西山遺跡	散布地	相楽郡木津町市坂字西山	小池　寛	63. 1.19 ～63. 2.19	溝・合口甕棺墓(奈良時代)
43	瀬後谷遺跡	散布地	相楽郡木津町市坂字瀬後谷	石尾　政信	62. 7.13 ～62. 9. 2 62.11.17 ～63. 1.23	流路(中近世)・興福寺式軒平瓦

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
44	菩提遺跡	散布地	相楽郡木津町市坂字菩提	戸原 和人	63. 2. 19 ～63. 3. 5	顕著な遺構なし

付表3　調査遺跡種類別集計表

件数＼種別	集落跡	散布地	古墳・古墳群	横穴	都城跡・官衙跡	城跡・城館跡	窯跡	合計
小計	6	12	9	1	10	5	1	44

舞鶴線建設に伴うものである。

前記したように京都府下における発掘調査は年間多数に上っており，その調査成果についても多岐にわたっている。ここでは，当調査研究センターの行った調査を中心にして概略を述べることにしたい。

丹後・与謝地域　この地域では今年度9か所の調査を行った。これらのうち，1～7は国営農地開発，8は学校建設，9は圃場整備に伴う調査である。

1鳥取城跡は，久美浜湾に面する丘陵上に所在する山城で，在地の土豪栗田内膳正の守城と伝えられている。今回は範囲確認のためのトレンチ調査を実施し，掘立柱建物跡2棟のほか，土坑墓1基を検出した。出土遺物は13世紀代のものが大半を占める。

2アバ田古墳群は，金銅装双龍環頭大刀で著名な湯舟坂2号墳の所在する谷をひとつ隔てた谷の奥部に位置する。開墾等で封土はすでに流失していたが，片袖式の横穴式石室墳2基が確認できた。6世紀後半の築造時期が推定され，馬具等の遺物が出土した。

3アサバラ遺跡は，アバ田古墳群が所在する谷の入口部に広がる遺跡である。遺構有無の確認のため試掘調査を実施した結果，柱穴や竪穴式住居跡の一部のほか古墳時代から中世にかけての土器片等が出土した。次年度に本調査の予定である。

4稲荷・普甲古墳群は，竹野川を望む丘陵尾根上に立地する古墳群で総計22基からなる。今回の調査では，木棺直葬墳11基とこれに伴う16基の埋葬主体部を確認した。古墳はいずれも地山を整形したのみで顕著な封土を持たず，特に尾根先端部のものは急斜面を階段状に削り主体部を設けていた。副葬品としては玉類・鉄器・竪櫛・土師器等がみられ，5世紀前半を中心とする時期に比定されている。

5新ケ尾東古墳群では，3基(8・9・10号墳)の古墳を調査した。うち2基は木棺直葬墳であったが，最上部に位置する10号墳は直径11mの円墳で竪穴系横口式石室に類似する石室をもつことが判明した。築造時期は8・9号墳が6世紀中頃，10号墳は6世紀後半に比

定される。10号墳石室と同種の石室は後述する遠所１号墳で確認されており，木棺直葬墳との共存が指摘されている。今後その系譜や築造時期等が課題になるものと思われる。

６遠所（えんじょ）古墳群は，昭和33年の発掘調査で衝角付冑や船形埴輪が出土したニゴレ古墳と同一谷筋に位置する。総数21基の古墳が確認されており，今年度は尾根先端部の１号墳のみ発掘調査を行った。直径14ｍの精美な円墳で，石材の抜き取り等により大きく破壊されていたが羨道部の短い竪穴系横口式石室を検出した。墳丘上からも須恵器類が出土し，祭祀に係わるものと想定される。築造時期は出土した須恵器から６世紀後半に比定される。

７高山古墳群は，７・12号墳の２基の横穴式石室墳を調査した。12号墳は直径18ｍの円墳で石室全長12ｍを測る丹後地域においても最大級の横穴式石室をもつ。出土遺物には大きな話題を呼んだ金銅製双龍環頭大刀柄頭２点のほか，須恵器の特殊扁壺等類例の少ないものが含まれている。双龍環頭大刀は京都府下ではこれまで２例見つかっているが，いずれも丹後半島の周辺部でありその性格等今後論議を呼ぶものと思われる。

８橋爪遺跡は，過去３次の調査によって弥生時代中期から平安時代に至る複合集落遺跡であることが知られている。今回の調査地は山裾の一画にあたっており，旧校舎建設時に削平を受けたものとみられ，顕著な遺構等は検出できなかった。

９谷内遺跡は，昨年度に続き調査を行ったもので，今回新たに弥生時代後期の円形竪穴式住居跡１基，古墳時代中期の方形竪穴式住居跡６基を検出した。住居跡の残存状況は良好でないが，うち１基からは布留式土器の一括資料が出土した。また，包含層から高山寺式に属する縄文早期の押型文土器が比較的まとまって出土した。

中丹地域　この地域では14か所の遺跡の調査を行った。10は建設省の由良川改修，11は道路改良，12・14は学校建設，15は工業団地造成，23は広域農道，15～22は近畿自動車道舞鶴線建設に伴う調査である。

10桑飼上遺跡は，由良川下流域の自然堤防上に位置する。次年度以降の本調査に向け，トレンチによる試掘調査を行った。検出遺構としては，古墳時代前期から奈良時代にかけての竪穴式住居跡や方形掘形をもつ大型の掘立柱建物跡があり，今後の調査が期待される。

11シゲツ（茂津）窯跡は，縄文時代から近世に至る大規模複合遺跡である志高遺跡の対岸に位置する。崖面に窯体の断面が露出し灰原・炊口部は消失しているが，推定全長9ｍの半地下式無段登窯であることが確認できた。製品には須恵器の杯・蓋・椀・鉢等があり操業時期は７世紀後半に比定される。なおこの他に窯に付随する焼土坑と同丘陵稜線部から弥生時代後期・古墳時代前期の土坑墓を計３基検出した。

12泉源寺遺跡は，鎌倉時代南都西大寺の荘園であった「志楽荘」に該当する地である。

今回の調査により上部を削平された横穴式石室1基および掘立柱建物跡1棟・柵跡・土坑等を検出した。後者の遺構群は中世に属するもので，荘園との関連が窺われる。

13栗ケ丘古墳群では，これまで調査を行った丘陵部に立地する9基の木棺直葬墳に加え，新たに横穴3基と土坑墓10基を確認した。立地場所や埋葬形態の異なるこれら3種の古墳の築造時期はいずれも6世紀後半に含まれるもので時期的に大きな差は認められない。なお，横穴墓の存在が希薄な丹波地域では，今回はじめての発掘調査例となった。

14蒲生（こもう）遺跡は，丹波高原に所在する数少ない弥生時代から古墳時代の集落遺跡として知られている。今回調査地は校舎造成時の削平が著しく，顕著な遺構は検出できなかった。

15小貝（おがい）遺跡は，由良川中流域を望む台地上に立地する。調査の結果，圃場整備等による削平が著しいが，一辺8～9mを測る弥生時代後期の方形周溝墓1基のほか，奈良時代の掘立柱建物跡1棟・集石遺構・柵列等を検出した。

16私市（きさいち）円山古墳は，小貝遺跡北側の標高94mを測る独立丘陵の頂部に立地し，眺望に極めて優れた位置を占めている。当初城館跡として調査を開始したが，周辺から葺石・埴輪列が検出され，測量調査の結果，全長70m級の造出し付き円墳であることが判明した。墳頂部から小石室を伴う経塚が検出され銅製経筒1点のほか，鉄鏃・土師器皿類・瓦器椀等が出土した。経塚の造営時期は平安末～鎌倉時代前期に比定される。古墳は5世紀中頃から後半に築造されたものと考えられ中丹地域最大の規模をもつ。次年度継続調査の予定。

17小西町田遺跡は，後述する三宅遺跡と犀川を挟んで対峙する位置にある。今回の調査により弥生時代末から古墳時代初頭の溝・土坑を確認したほか，奈良～平安時代の掘立柱建物跡に伴う多数の柱穴を検出した。大量に出土した各時代の出土遺物中には，タタキ技法をもつ弥生末期の土器や平安時代の緑釉陶器・墨書土器・陶硯類等当地域では特異なものが含まれていた。後者についてはその内容から官衙的な施設の性格が想定されている。

18三宅4号墳は，豊富な遺物が出土した荒神塚（1号墳）を含む三宅古墳群中の一基で，長年の採土により現状は墳丘の一部を留めるのみである。調査の結果は，主体部も大きく破壊されており，わずかに盛土築成の状況が確認できたのみであった。

19三宅遺跡は，三宅古墳群が立地する同じ台地上に広がる遺物散布地である。今回の調査により弥生中期の方形周溝墓をはじめ多数の土坑墓群や・三宅古墳群の一画をなす削平された古墳の周溝および古墳時代後期の小石室墳・中世の掘立柱建物跡・溝等を検出した。水田部分に密集する土坑墓群には弥生中期に属する壺が埋納されており大規模な墓地遺跡に発展する可能性がある。次年度継続調査が予定されておりその成果が期待される。

20福垣城館跡は，三宅遺跡背後の丘陵部に位置する中世城館で，現地には堀切り・曲輪等の施設が現存する。同地からは礎石建物跡のほか横堀を検出した。出土遺物中には陶邑

編年1期に属する須恵器が含まれており，付近に古墳の存在が想定される。

21福垣北古墳群は，丹波最大級の大型群集墳である以久田野古墳群の一画に位置する。今回4基の古墳(2・3・4・5号墳)について調査を実施した。いずれも自然地形を最大限に利用した方墳ないし円墳で，木棺直葬からなる複数の埋葬施設が確認された。出土遺物の大半は土器・鉄器・玉類であるが，3号墳では陶邑TK73型式に所属する初期須恵器，2号墳第4埋葬施設からは小型仿製鏡，4号墳周溝から円筒埴輪が出土した。本古墳群は5世紀中葉から後半に築造が開始されたと考えられ，以久田野古墳群の成立の問題等を含めその関係が注目される。63年度も継続調査が行われる予定であり成果に期待したい。

22平山城館跡は，61年度からの継続調査である。今回は第二郭で床面に礫を敷く礎石建物跡2棟・柵列・土坑・石組状遺構・柱穴等を検出したほか，西側斜面で14本の畝状竪堀遺構をほぼ完掘した。戦国時代の城館跡調査として今後代表的な例になるであろう。

23青野遺跡は，由良川中流域の自然堤防上に位置する弥生時代から奈良時代・中世に至る広大な複合集落遺跡であり，今回調査地は青野遺跡の西端部にあたる。検出遺構には，集落の西限を画す旧河道のほか，弥生時代中期の溝2条・土坑，古墳時代前期の布留式土器が伴う方形竪穴式住居跡1基等がある。出土した弥生中期の良好な土器群は，当地域の弥生土器の研究に今後大いに活用されるものと思われる。

南丹・北桑田地域　本地域では4か所の遺跡の調査を行った。24・25・26は府立高校建設，27は国道9号バイパス建設に伴う調査である。

24上中遺跡は，山間の小谷平野に位置する弥生時代から中世に至る集落遺跡である。今回検出遺構としては古墳時代前期の方形竪穴式住居跡1基・土坑4基・柱穴がある。またこのほか火葬墓と考えられる奈良時代に属する炭を含む土坑とそれに伴う柱穴がある。

25園部城跡は，江戸時代初め元和5(1619)年小出氏により築城された平山城である。今回検出遺構としては排水施設に関連する石組み溝のほか，土坑・井戸等がある。

26亀山城跡は，天正年間(1578～1579)に明智光秀により築城され，明治初年まで存続した。検出遺構は二期に分けられ，上層では江戸・明治の区画溝，下層からは古墳時代の方形竪穴式住居跡2基・奈良時代の掘立柱建物跡2棟を検出した。下層遺構の性格については今後の課題であるが，付近に所在する三宅の地名とともに興味の持たれるところである。

27千代川遺跡は，50年度以降継続して調査を行っている。今回の調査では，古墳時代前期の自然流路のほか奈良～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡7棟や溝・井戸等を検出した。奈良・平安期の建物跡は昨年度検出した一群とともに一連の建物群を構成するものと思われる。またNo. 21区で確認した幅6mの溝は推定丹波国府域の北限を示す施設に関連する

ことが窺われる。出土遺物としては，各時代の土器類のほか縄文土器・有舌尖頭器２点があり，また今回初めて「承和七年三月廿五日」(840年)と記された木簡が出土した。木簡の遺存は墨書土器とともに丹波国府の存続時期を検討するうえで重要な資料になる。

京都・乙訓地域　この地域では８か所の遺跡調査を行った。28･31は学校建設，29は府民ホール建設，30は府庁舎建設，32～33は道路改良・新設工事，35は法務局改築に伴う調査である。

平安京跡関係の調査28･29･30は，３件実施した。28は昭和54年の調査によって平安時代前期の大規模な貴族の邸宅跡が確認されている。今回(第７次)調査では，中心建物群の南西部分で東西方向の掘立柱建物跡１棟のほか，宅地割りの溝・竪穴式住居跡２基等が検出され従来の調査成果に新たな資料を加えた。29は，61年度からの継続調査である。調査地点は内膳町遺跡の範囲にも含まれており，縄文晩期から弥生前期の遺物が採集できた。平安時代の遺構としては大規模な井戸があり，石銙帯の出土等からみて貴族の屋敷跡の可能性がある。また，桃山文化をしのばす金箔瓦の出土や鎌倉以降江戸時代に至るまでの各時期の遺構・遺物が検出されており，当地域の変遷だけでなく，平安京の歴史的重層性を再認識する貴重な資料を得た。30は63年度継続調査の予定である。調査地点は西洞院大路と近衛大路の交差点にあたり，今年度は西洞院大路の変遷を知る資料や江戸後期の町家の一端をうかがう資料を得た。

長岡京関係の調査(31～35)は今年度５件あった。31では，競馬場造成時の削平が激しく遺構等は検出できなかった。32は外環状線建設に伴う調査で，今里遺跡の範囲にもあたる。調査の結果，西二坊大路東側溝と二条条間大路南側溝の交差部分が確認された。両大路は河川を埋め立てて造成されており，奈良時代後半から長岡京期の文書木簡１点・「園」「相」などの墨書土器・軒瓦が出土した。周辺に官人の邸宅か役所の存在が推定される。63年度継続調査の予定である。33では全長30ｍの前方後円墳である塚本古墳の周濠を確認した。古墳は完全に削平されているが，今回の調査によりほぼ全体の規模・形状が明らかとなった。周濠内からは多量の円筒埴輪のほか家形・蓋形・石見型の楯形などの形象埴輪が出土した。周濠の埋没時期は長岡京期と考えられる。34は昨年度からの継続調査であり，今回は竪穴式住居跡等の資料を新たに加えた。35は推定豊楽院の一画にあたる重要地区である。今年度は既存建物の基礎撤去作業のみを行った。本調査は次年度の予定であり，その成果が期待される。なお，長岡京の調査全般は，本情報の「長岡京跡調査だより」に詳しい。

南山城地域　本地域で９件の調査を行った。36は京奈バイパス，37は国道163号線バイ

パス，38は郵便局新築，39は府道建設，40～44は木津ニュータウン建設に伴う調査である。

36南稲八妻城跡は，『大乗院寺社雑事記』に初見する山城で，山城国一揆の主要な舞台となった。昨年度の2回に分けて調査を実施したが，今回も城跡の存在を示す確証は得られなかった。城跡比定の正否とともに，より広範囲な調査がまたれるところである。

37恭仁京・八後（やご）遺跡では，奈良時代の路面跡2条とそれに伴う轍跡・溝・自然流路等を検出した。道路遺構は推定恭仁京右京中軸線の「作り道」（中ツ道）に近接しており，両者の関連が考えられるが，今回の検出部分はごく限られた範囲であり，今後の資料の増加をまって検討されるべきものと思われる。

38興戸遺跡では，古墳時代前期の土坑2基・ピット等を検出した。土坑内からは布留式土器の各器種がまとまって出土しており，周辺部に同時期の集落の存在が予想される。

39八ケ坪遺跡は，式内相楽神社に隣接しており，調査地内を歌姫街道が通過する。これまでの調査によって掘立柱建物跡や条里遺構が検出されている。今回も掘立柱建物跡の一部や中世に属する条里水田の溝を確認した。

40上人ケ平遺跡は，昨年度に継続して調査を行い，遺跡の性格等がほぼ明らかになってきた。これまでの調査では，古墳時代前期の竪穴式住居跡群や造り出し付円墳の上人ケ平5号墳（市坂古墳）を盟主とする5世紀中葉から後半期の小方墳群，さらには平城宮大膳職に使用する瓦を焼いた市坂瓦窯に係わる工房跡や瓦類の検出等，多くの成果が得られている。今回の調査では，弥生時代後期の方形竪穴式住居跡1基を検出し，本遺跡の年代が同時代まで確実に遡ることが判明した。本遺跡については，次年度以降本調査が予定されており，それにより遺跡の全体像が明らかになるものと期待される。

41瓦谷遺跡では今年度，古墳時代前期に開削された数条の流路状遺構と奈良時代の井戸1基を検出した。井戸は下段を留めるのみであるが，横板蒸籠組で井戸枠材は櫃を転用したものとみられる。近年，南山城地域では奈良時代の井戸の調査例が増えてきており，新たな資料を加えることになった。

42西山遺跡からは，円形にめぐる溝の一部と土坑・ピットのほか，奈良時代の合口甕棺墓を1基検出した。古墳時代から奈良時代にかけての遺物が出土しており，周辺部に同時期の遺構群が存在する可能性が高い。

43瀬後谷（せごだに）遺跡では今回範囲確認の調査を行った。その結果，鎌倉時代から江戸時代に構築された水路跡とそれに伴う堤跡を確認した。また，遺構に伴うものではないが，比較的まとまって出土した奈良時代の遺物のなかに興福寺式軒平瓦が含まれており，周辺部に同型式の瓦を焼いた瓦窯の存在が想定される。

44菩提遺跡は昭和60年度に一部調査を行ったが，今回の調査では谷状地形を確認したの

みで顕著な遺構は検出されなかった。

以上，昭和62年度の京都府下の調査について，当調査研究センターの調査を中心に概略を述べた。詳細については，各遺跡の概要報告書ならびに末尾に付した『京都府埋蔵文化財情報』・現地説明会資料・中間報告資料等を参照されたい。なお，今回ふれなかった各市町村教育委員会や府下関係機関の調査については，京都府教育委員会刊行の『埋蔵文化財発掘調査概報』に毎年，府下の調査概要が紹介されている。あわせて参照されたい。

終わりに，文中で触れた丹後町高山12号墳については，きわめて重要な成果が得られたことから，土地所有者の方をはじめとして丹後町および京都府の両教育委員会，農林水産省近畿農政局・同丹後開拓建設事業所等の御努力によって，調査後現状のまま保存されることになった。調査を担当した当調査研究センターとしても，関係機関の御理解に感謝したい。今後，我々をはじめ多くの方々がこの遺跡を十分に活用することが，保存に努力された関係者への感謝と敬意を表することになり，また，貴重な遺跡を後世に残すことの意義をさらに訴えることになるものと思われる。

（つじもと・かずみ＝当センター調査第２課調査第１係長）

付表４　昭和62年度センター現地説明会実施遺跡一覧

遺跡名称	資料番号	開催日
野崎古墳群	No.87-04	1987. 5. 6（61年度調査分）
高山古墳群・高山遺跡	No.87-05	〃 . 5.20（　〃　）
29. 平安京跡(2)	No.87-06	〃 . 5.23
9. 谷内遺跡	No.87-07	〃 . 7. 9
22. 平山城館跡・平山東城館跡	No.87-08	〃 . 7.25
7. 高山12号墳	No.87-09	〃 . 8.23
13. 栗ケ丘横穴群	No.87-10	〃 . 9. 5
2. アバ田古墳群	No.87-11	〃 .10.28
40. 上人ケ平遺跡	No.87-12	〃 .11.14
11. シゲツ窯跡	No.87-13	〃 .11.21
4. 普甲古墳群・稲荷古墳群	No.87-14	〃 .11.25
5. 新ケ尾東古墳群	No.87-15	〃 .11.25
17. 小西町田遺跡	No.87-16	〃 .12.14
19. 三宅遺跡	No.88-01	1988. 1.30
27. 千代川遺跡第13次	No.88-02	〃 . 2.13
23. 青野遺跡	No.88-03	〃 . 2.20
32. 長岡京跡右京第285次	No.88-04	〃 . 2.20

付表５　昭和62年度センター関係者説明会実施遺跡(中間報告資料作成)一覧

遺跡名称	資料番号	開催日
33. 長岡京跡右京第266次	No.87-08	1987. 7.20
26. 丹波亀山城跡	No.87-09	〃 . 9.25
28. 平安京跡	No.87-10	〃 . 9.27
24. 上中遺跡	No.87-11	〃 .10. 5
38. 興戸遺跡	No.87-12	〃 .10. 6
37. 恭仁京跡・八後遺跡	No.87-13	〃 .10.15
25. 園部城跡	No.87-14	〃 .11.12
15. 小貝遺跡	No.87-15	〃 .11.18
34. 長岡京跡右京第277次	No.87-16	〃 .11.25
12. 泉源寺遺跡	No.87-17	〃 .12.10
39. 八ケ坪遺跡	No.87-18	〃 .12.11
14. 蒲生遺跡	No.88-01	1988. 2. 4
10. 桑飼上遺跡	No.88-02	〃 . 2.10
30. 平安京跡	No.88-03	〃 . 3.14

付表６　『京都府埋蔵文化財情報』掲載遺跡

第25号　1987.9	第26号　1987.12	第27号　1988.3	第28号　1988.6
	(28) 平安京跡 —平安京右京一条三坊九町(第７次)の調査— (37) 恭仁京跡・八後遺跡 —木津町八後遺跡・恭仁京跡(作り道)の発掘調査—	(7) 高山古墳群 —高山古墳群(７・８・11・12号墳)の発掘調査— (13) 栗ケ丘古墳群 —栗ケ丘横穴群について—	(40～44) 上人ケ平遺跡他 —木津地区所在遺跡の調査—
—略報— 1. (1) 鳥取城跡 2. (33) 長岡京跡右京第266次 3. (9) 谷内遺跡第４次 4. (22) 平山城館跡 5. (36) 南稲八妻城跡	—略報— 6. (2) アバ田古墳群 7. (6) 遠所古墳群(1号墳) 8. (8) 橋爪遺跡第４次 9. (24) 上中遺跡第５次 10. (25) 園部城跡 11. (26) 丹波亀山城跡 12. (38) 興戸遺跡	—略報— 13. (5) 新ケ尾東古墳群 14. (4) 普甲古墳群・稲荷古墳群 15. (12) 泉源寺遺跡 16. (11) シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群 17. (17) 小西町田遺跡 18. (15) 小貝遺跡 19. (14) 蒲生遺跡 20. (31) 長岡京跡右京第281次 21. (39) 八ケ坪遺跡	—略報— 22. (10) 桑飼上遺跡 23. (21) 福垣北古墳群 24. (23) 青野遺跡第13次 25. (27) 千代川遺跡第13次 26. (32) 長岡京跡右京第285次

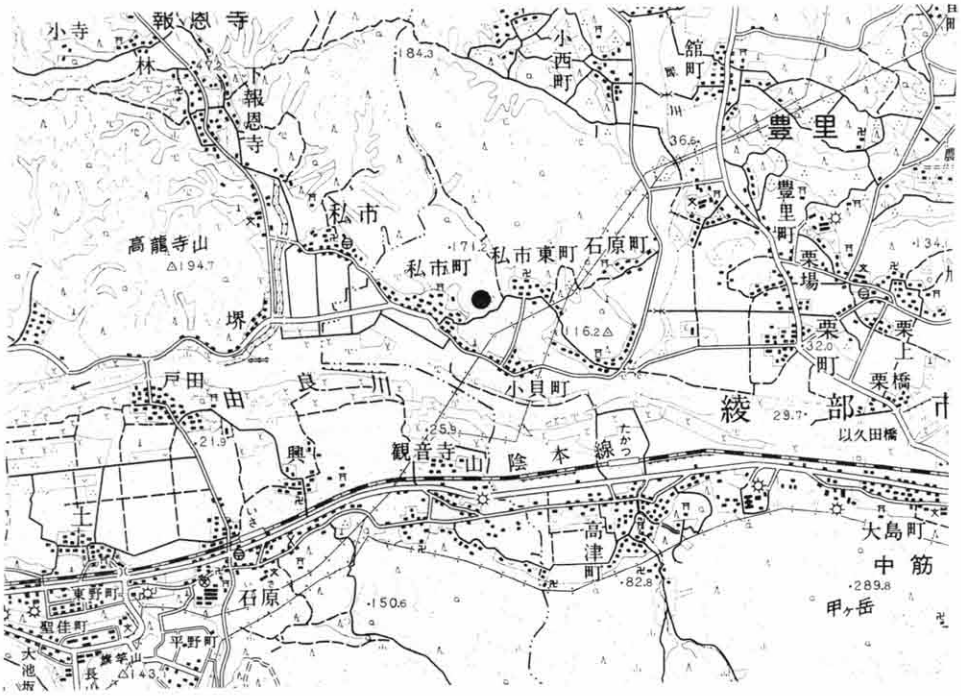
私市円山経塚の調査

鍋田　勇

1. はじめに

私市円山経塚は，日本道路公団の計画する近畿自動車道舞鶴線の建設に先立ち，当センターが発掘調査を行った円山城館跡で，新たに確認された経塚である。円山城館跡は，昭和62年度の調査によって，大規模な古墳であることと，さらにその頂部に経塚の営まれていることが明らかになった。古墳については，昭和63年度も調査を継続中であり，今回は，調査を終えた経塚について，その概要を紹介するにとどめたい。

私市円山経塚は，京都府綾部市私市町に所在する。経塚の営まれた場所は，由良川の北側に位置し，通称「円山」と呼ばれる標高約94mの丘陵上である。ここからは，南側に広がる由良川中流域の平野を見おろすことが可能であり，経塚の立地としては，申し分のない場所といえよう(第1図)。



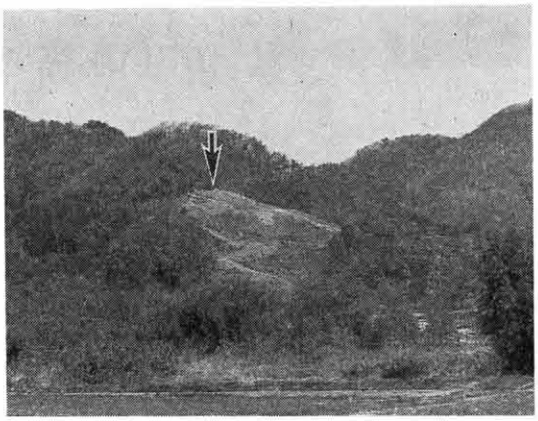
第1図　私市円山経塚位置図(●印，1/50,000)

2.　調査の経過

経塚は，古墳の墳頂部調査中に，新たに見つかり，最終的に経塚と確認するまで，以下の手順を踏んだ。

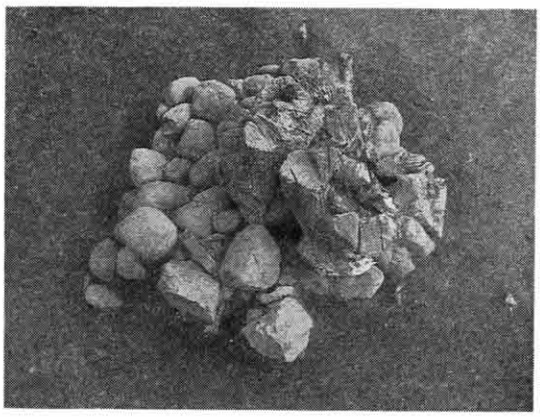
古墳の墳頂部は，直径約17mの広い平坦面を有しており，表土を除去した段階で，この平坦面のほぼ中心部において大きな木の株を中心にして古墳の葺石を集めた塚状の集石を確認した(第1検出面)。また，周辺部には，3～5cm大の小石の集石が部分的に広がっていた。中央部の集石内からは，陶器・瓦器片等が出土したため，この集石は，経塚あるいは中世墓の可能性が高いと判断し，調査を進めた。その後，礫石を取り除くと，一辺約1mの範囲内に，やや大きな礫石が密集しているのが見つかった。これらの石は，土坑内に入れられたものと思われたが，木の株が石を取り込むように入り込んでいたため，やむなく，周囲の土を除去し，集石を検出した(第2検出面)。

次に，この石と木の株を取りはずすと，土坑及び小石室・経筒が検出され(第3検出面)，経塚であることが明らかになった。なお，前述した周辺部の集石については，中世墓の可能性が考えられたが，土坑等の遺構を伴わず，性格は不明である。

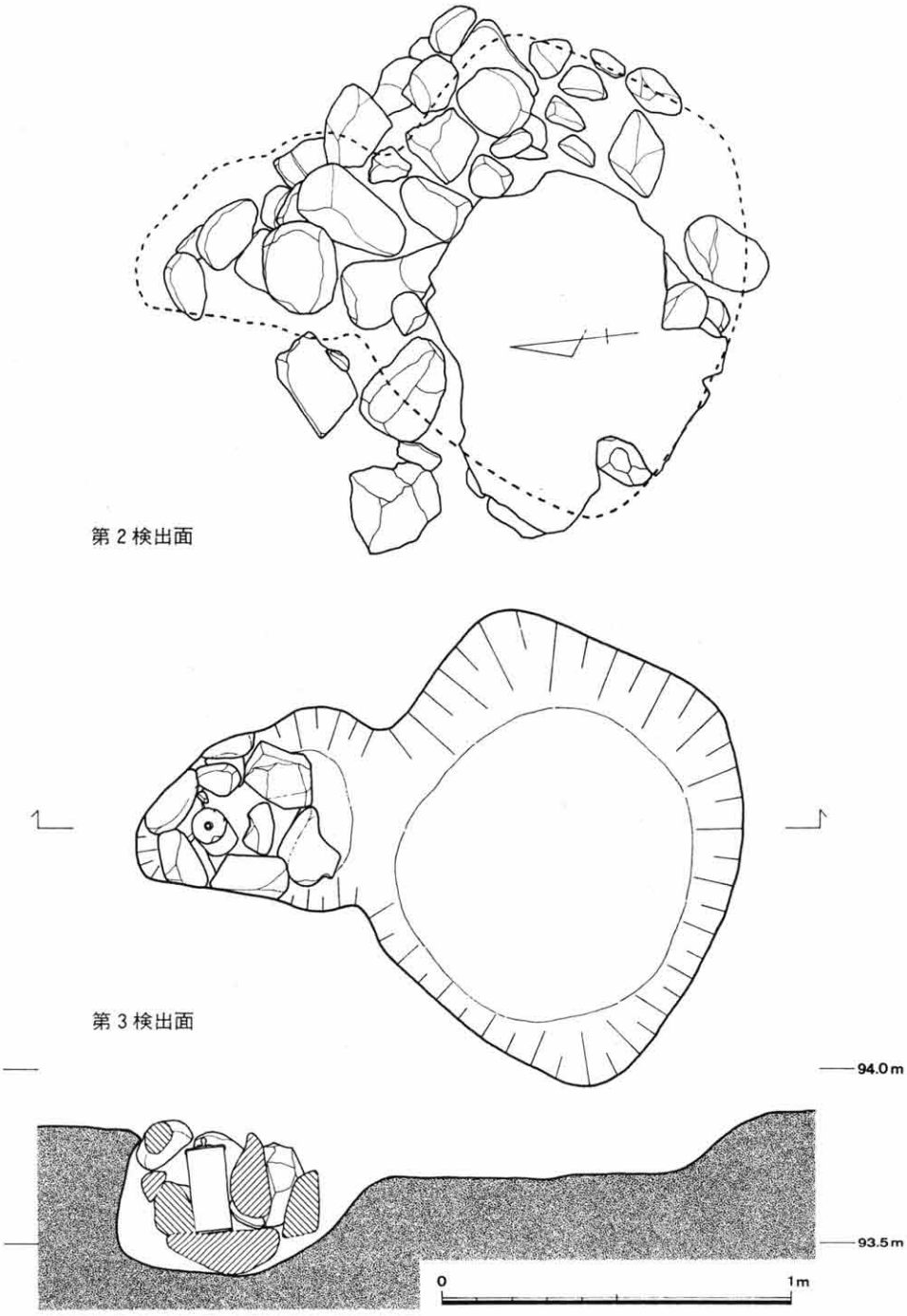


調　査　地　遠　景（南から）

経塚の検出状況（第1検出面，西から）



経塚の検出状況（第2検出面，北西から）



第2図　第2・第3検出面平面図及び断面図（scale＝1/20）

3.　経塚の構造と遺物の出土状況

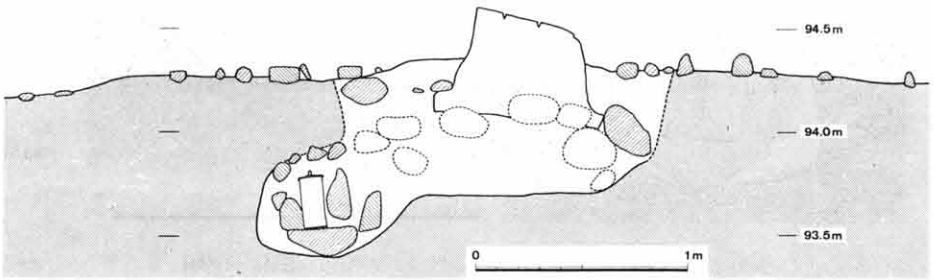
経塚は，中心となる土坑(以下，主土坑と記す)と，小石室から構成される。主土坑内には，前述したように，木の根が複雑に入り込んでいたため，土坑の検出は，第3検出面においてしか行うことができず，内部の構造にも不明な点が残っている。この検出面での主土坑の平面形は，一辺約1mの隅丸方形状を呈し，深さは約0.2mを測る。推定では，地表面から約0.6m掘り下げたものと思われる。

小石室は，土坑内から横穴をうがって構築された可能性が強く，横穴は，主土坑の北側の壁から，さらに掘り下げて造られている。石室は，この横穴に，平らな面を持つやや大きな石を据え，四方を石で囲んだものである。石室の開口部である南側には，1石だけを据え，奥壁及び両側壁には，2～3段に，壁に石を張り付けるように積み上げている。第3図における石室上部の石(第2検出面で検出した石)は，いわゆる天井石ではなく，側壁の石がずれ落ちたものと考えられるため，天井石は，用いられなかったものと思われる。石室内の石には，大きめの石が使用されているが，積み上げの際に側壁の安定を図るため，握り拳大のやや小さな石も用いられている。経筒は，外容器を伴わず，石室内に直接埋納されていたが，経筒を納めた後，東側に石を2石はめ込み，経筒を安定させていた。石室内からは，経筒のほか，鉄鏃3点が出土した。このうち2点(実測図番号2・3)は，石室の北西隅から，残り1点(同4)は，底石の除去後，横穴の奥から出土したものである。4については，石室の構築中に納められたものと考えられる。

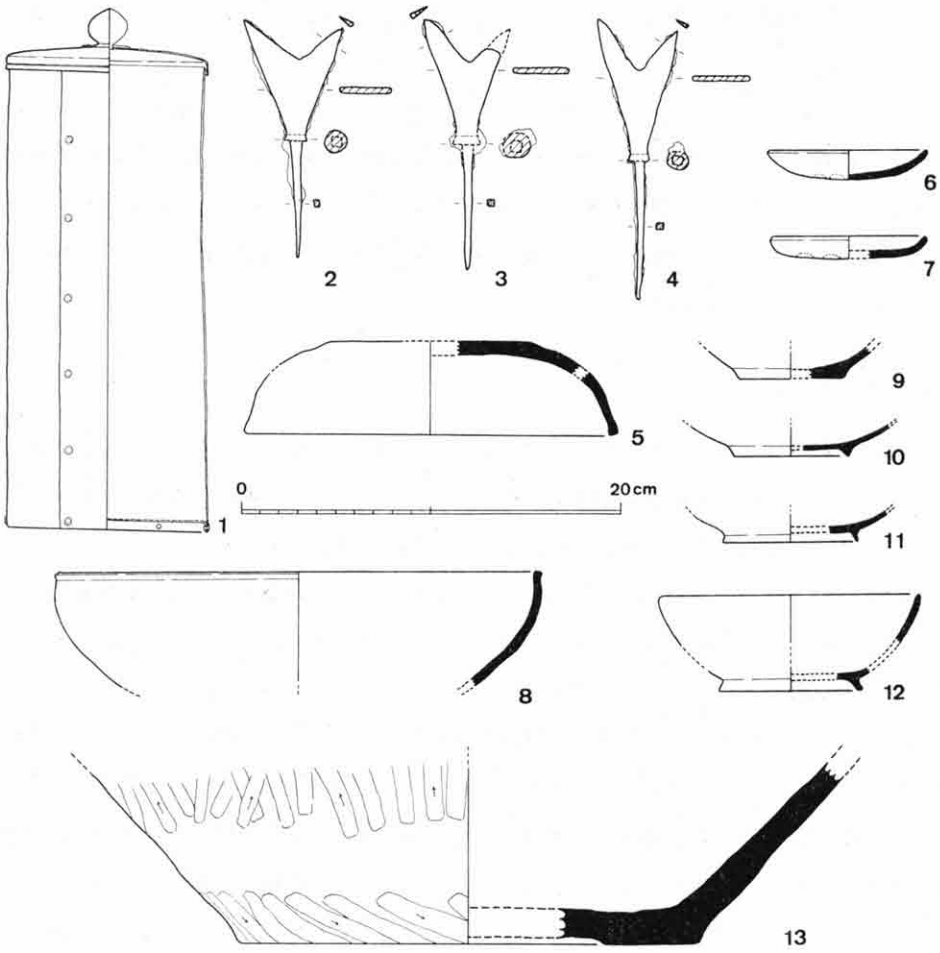
経筒の埋納後は，主土坑に大きめの石を詰め込んでいるが，土坑の底からは遺物は出土しておらず，土坑内の上層で，土師器蓋・小皿・瓦器椀が破片の状態で出土している。

4.　出土遺物

出土した遺物は，石室内から，経筒1点・鉄鏃3点，主土坑内から，土師器蓋・土師器小皿・瓦器椀，第1検出面(表土内)から，陶器甕・土師器皿・瓦器椀等がある。



第3図　私市円山経塚の構造模式図



第4図　出土遺物実測図（scale=1/4）

1は，経筒である。経筒は，蓋と筒身から構成される。蓋は，平面形が円形を呈するかぶせ蓋であり，一段の鈕座を設けて，やや大きな宝珠形のつまみを取り付けている。外縁には，1条の沈線が巡っている。筒身は，厚さ0.7mmの銅の板を筒状に曲げて鋲で留め，別作りによる上げ底の底板を同じように鋲で側面と固定している。経筒には，銘は記されていない。蓋の高さ3.6cm・口径10.7cm，鈕座の直径2.6cm，筒身の高さ29.5cm・口径10.3cm・底径10.6cm，筒身に蓋をかぶせた状態での高さ27.6cmを測る。経筒内には経典等と思われる炭化物が遺存していたが，詳細は不明である。

2～4は，いずれも雁股式の鉄鏃である。逆刺は有さないが，鋭利なものである。

5～8は，主土坑内上層出土遺物である。5は，土師器の蓋と考えられ，ていねいなつくりである。口径は，19.6cmを測る。6・7は，土師器小皿である。7は，口径8.3cmを

測る。8は，瓦製の鉢と考えられる。これら主土坑内の遺物には完形のものはなく，また，いずれも摩滅が著しい。

9～13は，第1検出面で出土した遺物である。9は，平高台を持つ土師器椀である。内外面とも摩滅が著しく，調整は不明である。底径5.0cmを測る。10～12は，瓦器椀である。11・12は，しっかりとした高台を持つ。12の体部は，緩やかに内湾し，口縁端部を丸くおさめる。12は，口径14.0cmを測る。13は，丹波焼と思われる大型の甕である。体部外面にはケズリを施し，内面は横ナデを行っている。

5. ま と め

今回の調査で明らかになった私市円山経塚は，発掘調査を実施した例として，京都府下では3例目にあたる。経塚の発掘例は，比較的少ないことから，貴重な成果を収めたと言えよう。以下，経塚の築造年代および構造について簡略にまとめてみたい。

〔築造年代〕 経塚の築造された年代は，主土坑内出土の土師器小皿，第1検出面出土の瓦器椀等から，ほぼ13世紀に比定され，鎌倉時代前半頃と考えられる。しかし，これらの遺物が経筒埋納時のものかどうか検討が必要と思われ，さらに遡る可能性も残る。

〔経塚の構造〕 前述したように，この経塚の構造は，主土坑と小石室からなる特異な形態と考えられる。これに類似した例としては，「横口式の石室」と呼称する兵庫県出石町の田多地経塚[注1]や京都府久美浜町権現山経塚[注2]，同福知山市大道寺経塚[注3]があり，但馬・丹後・丹波地方という近接した地域に分布する特徴がある。こうした形態の経塚については，ここでいう主土坑に墓的な性格があるとし，他の遺構も含め，経塚をいわゆる複合遺跡ととらえる見解がある[注4]。私市円山経塚の場合，主土坑内の構造にやや不明な点が残るものの，第1検出面で出土した大型の甕を蔵骨器と考えることは可能であり，主土坑の性格については，今後の課題と言えよう。また，経塚に関連する遺構及び周辺の社寺については，現在も調査中であり，全体の調査終了後，改めて報告したい。

（なべた・いさむ＝当センター調査第2課調査第2係調査員）

注1　森内秀造他『田多地古墳群　田多地経塚群Ⅰ』（『出石町文化財調査報告書』第2冊　出石町教育委員会）　1985

注2　久保哲正他『権現山古墳発掘調査概報』（『京都府久美浜町文化財調査報告』第9集　久美浜町教育委員会）　1984

注3　竹原一彦「大道廃寺跡の調査」（『京都府遺跡調査報告書』第1冊　豊富谷丘陵遺跡（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

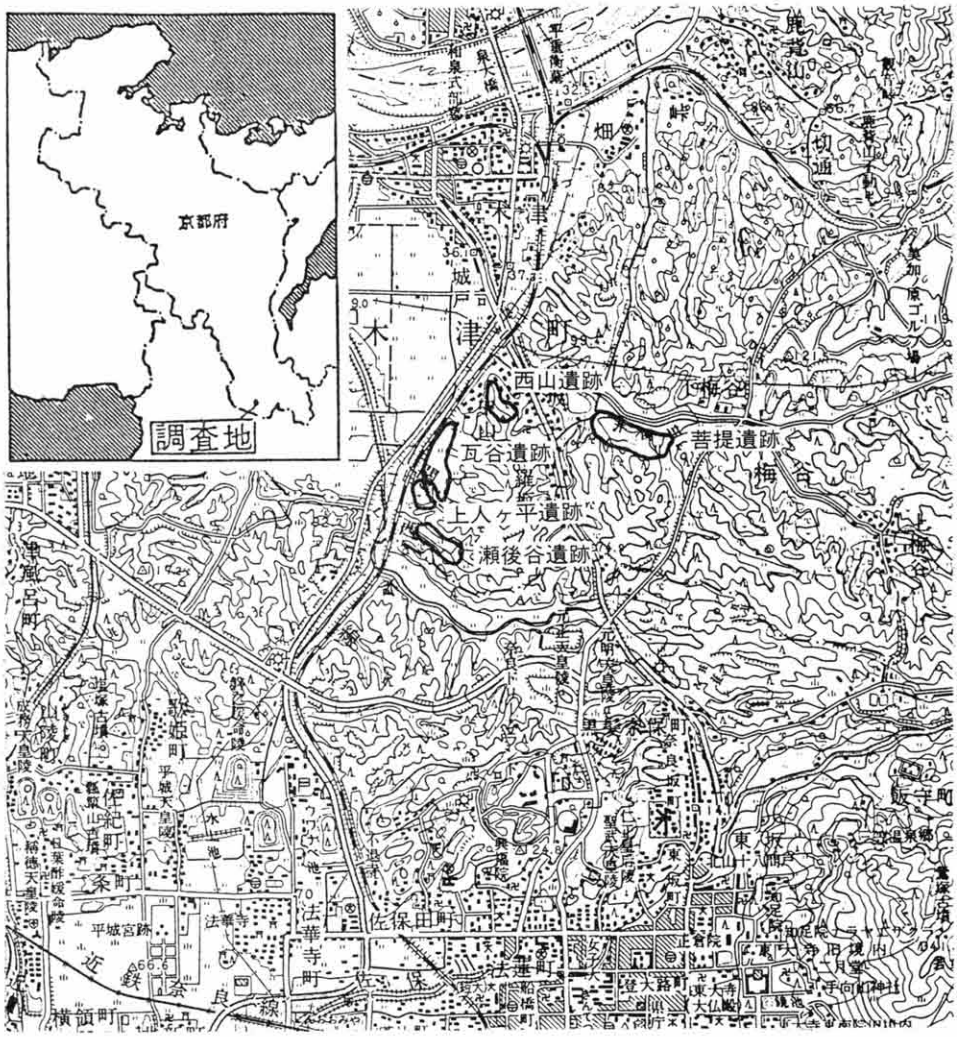
注4　杉原和雄「経塚遺構と古墓　―京都府北部を中心として―」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

昭和62年度木津地区所在遺跡の調査

戸　原　和　人

1. はじめに

この調査は，関西・文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査で，通称，木津東部丘陵(木津町鹿背山・木津・市坂・梅谷)の発掘調査である。



第1図　調 査 地 位 置 図

この地域内では，住宅・都市整備公団の依頼を受けて，昭和59年度から継続して調査が進められており，現在までに遺物散布地10か所，古墳推定地９か所について試掘調査及び発掘調査を行っている。

昭和62年度は，大字市坂地区で５遺跡について試掘調査を行った。すなわち，奈良県と境を接する瀬後谷遺跡，その北の台地の上人ケ平遺跡，さらにその北で，最も広い範囲に広がる瓦谷遺跡，瓦谷遺跡の北東に位置し，南北にのびる丘陵上に広がる西山遺跡，市坂の集落と梅谷の集落の間で，東西に貫流する井関川の南に位置する菩提遺跡の調査である。以下，各遺跡毎にその調査結果について概要を報告したい。

2.　調査の概要

a．上人ケ平遺跡

はじめに

上人ケ平遺跡は，木津町東部丘陵の中で最も平野部に突き出した丘陵上に位置し，標高は54～58ｍを測る。この遺跡からは，平野部や対岸の丘陵が一望でき，西方にある平野部との比高差は15～18ｍを測る。周辺には，上人ケ平１～５号墳（５号墳＝市坂古墳）や，平城宮大膳職に使用する瓦を焼いた市坂瓦窯などが古くから知られており，北方には推定恭仁京跡が広がっている。昭和59年度の調査では，奈良時代の遺構・遺物を検出し，昭和61年度の調査では，古墳時代の竪穴式住居跡・土坑などを確認した。今年度の調査においても，同時期の遺構・遺物の検出が予想されていた。

上人ケ平遺跡では，昭和61年度の成果に基づき合計10か所で調査を行った。詳細については弥生時代から古墳時代に関し前号で報告しており，奈良時代についても他に報告の予定があるため，ここでは概略を報告するにとどめたい。なお，ここに報告する遺構は，遺跡の全体像を分かりやすくするために，過去の調査分も合わせ，時代別に整理した。

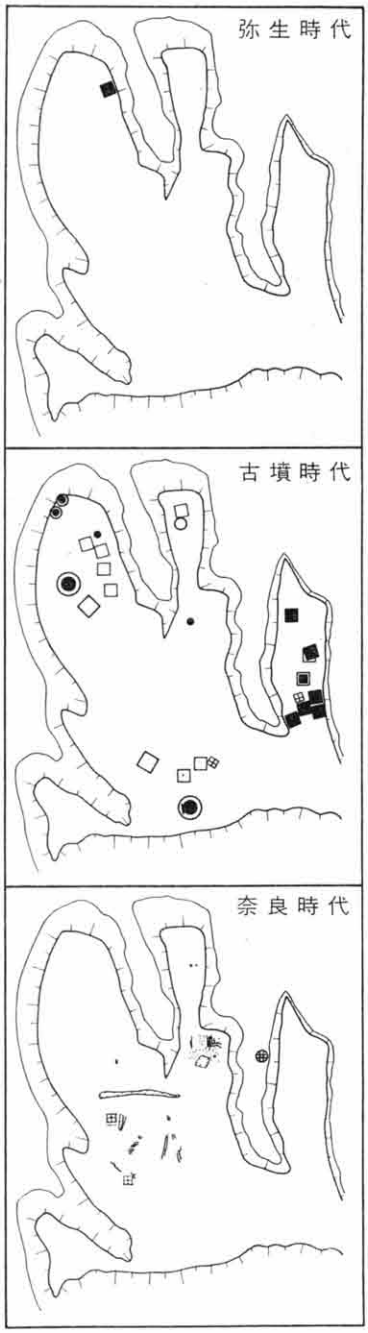
調査の概要

（弥生時代）

丘陵の北西尾根の先端で，一辺約5ｍの方形プランの竪穴式住居跡を１基検出した。検出状況から火災により倒壊したと考えられる。時期は，住居内から出土した鉢・甕などにより後期と考えられる。

（古墳時代）

丘陵の北東の枝尾根全域で，竪穴式住居跡８基と同時期と考えられる掘立柱建物跡２棟を検出した。時期は，古墳時代前期（布留式期）で，１か所で竪穴式住居跡の切り合いが認められる。



第2図　上人ケ平遺跡遺構変遷図

■ 竪穴式住居跡　● 土坑墓　□⊙ 古墳
⊞ 掘立柱建物跡　⊕ 井戸

また，丘陵の中央の枝尾根基部では，布留式の大型壺と甕を使用した，合せ口の壺棺墓1基を検出している。棺内からは，淡黄緑色のガラス小玉6点が出土した。

丘陵の南端中央から北西尾根にかけ，円墳2基（さらに2基の円墳が遺跡台帳に登録されている），小型の方形墳8基，北西尾根の先端付近で土坑墓1基を確認した。この内，円墳2基は，地上にマウンドを留めており，以前から周知されていたもので，小型方墳は，昭和61年度の調査によって初めて確認された。今回の調査でも，新たに小型方墳4基と土坑墓1基が検出されている。これらの古墳群の造営された時期は，南東の上人ケ平5号墳とその周辺の小型方墳がもっとも古く，5世紀中葉，北西尾根付近の円墳・小型方墳は，5世紀後半及び，6世紀後半の小型方墳・土坑墓がある。

（奈良時代）

上人ケ平遺跡の西に開く小さな谷に営まれた市坂瓦窯とともに平城京の造営のための瓦の生産地となる。掘立柱建物跡や溝などは真北に規制された区画を示し，官の工房の様相を呈する。また，瓦谷遺跡の範囲に入る瓦谷74番地では，同時代と考えられる井戸1基も検出している。

まとめ

今回の調査成果は，以下のとおりである。

(1)　3番地で検出した竪穴式住居跡（SB0305）は，弥生時代後期に造られたもので，標高54～55mの地点に位置しており，平野部が見下ろせる丘陵上に集落（高地性集落）を営んだことがわかる。

(2)　上人ケ平遺跡が位置する台地は，21番地から3番地にかけての主尾根と，それから北に派生する2本の枝尾根があり，円形墳や方形墳は，

すべて主尾根上に構築されている。一方，古墳時代前期の竪穴式住居は，東の尾根(34～36番地)に造られている。

(3)　古墳時代に築造された墳墓は，円形墳と方形墳に分類される。確認した古墳の大半は方形墳が占めるが，円形墳である上人ケ平5号墳は，造り出しがつくことから帆立貝式古墳ということができ，墳形・規模の点で他とは大きく異なっている。他の古墳群との位置関係からもこの古墳は，この地の首長の墓と考えられ，築造時期は5世紀中葉頃である。また，方形墳は，その主軸線から少なくとも2つの群構成をなすと考えられる。全体的に見て5世紀中葉～5世紀後半に築造されたと推定できるが，北西尾根で検出した方形墳からは6世紀後半の須恵器が出土している。

(4)　調査地内の各所で布目瓦が出土しており，これらの中には市坂瓦窯で焼成されたことが確認できる軒丸瓦や軒平瓦が多い。昭和59年度の調査では，軒丸瓦で，6133A型式と，6235A型式が出土し，平城Ⅳ式B型式の鬼面文瓦が出土している。昭和60年度の調査では，軒丸瓦で新たに6133C型式が確認された。さらに，今回の調査で，軒丸瓦で6133A(b)・6133B，軒平瓦で6718A・6725B(b)・6732C型式と6725型式系の軒平瓦が新たに確認されている。これらの瓦の構成と比率は，平城宮の調査で出土する瓦の構成に近似している。このことは，天平17(745)年の平城京還都以後，宮内の再造営に使用された瓦は，市坂瓦窯で焼かれたものが一括して持ち込まれたことを示すものとして注目できる。

今年度までの試掘調査で，瓦生産および操業に係わる作業場が谷部及び台地上に広がっていたことを確認した。ここで生産された瓦は，平城宮内へ供給されたもので，一部，東大寺で使用された瓦も出土していることから，生産地と，官と寺院という二種類の消費地の双方から検討できる資料としてきわめて重要である。昭和63年度からは上人ケ平遺跡の本調査が開始される予定であり，今後，遺跡の全体像が明らかになることによって瓦生産の構造も明らかになるであろう。

今年度の調査成果は，弥生時代・古墳時代・奈良時代の各時代におけるこの地域の歴史を考える上で，貴重な資料を提供したといえる。

b．瀬後谷遺跡

はじめに

瀬後谷遺跡は，市坂地区の南端に位置し，瀬後谷の南で東から西にのびる丘陵は奈良県に接する。国道24号線に向かって開く東西に長い谷部全体が奈良時代の土器や瓦の散布地として知られている。

調査の概要

今年度は，当地域での最初の調査になるため，遺物包蔵地の範囲確認と，その状況を確

第3図　瀬後谷遺跡調査地位置図

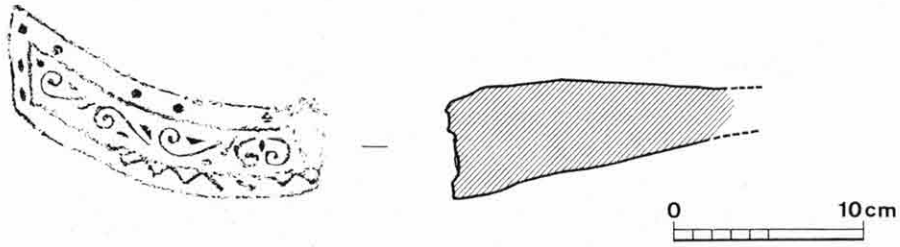
認することに主眼を置き，谷部の中央付近で一段高いテラス状の部分(34•36•38•39番地)，その下流で一段低くなる部分(21•22•31番地)，さらに下流地域(16番地)の3区域で計11か所のトレンチを設定して実施した。

34•36•38•39番地では，隣接する各トレンチ間でそれぞれ繋がりが想定できる上流からの氾濫による堆積を確認した。34番地南トレンチの断ち割りにおいて，奈良時代の須恵器・布目瓦片が出土した。他のトレンチでは，遺物包含層を確認するには至らなかった。氾濫堆積によって削り取られたか，もしくはさらに下層に存在すると考えられる。

谷の中央部で開けた31番地のトレンチでは，前記同様の状況で遺物包含層を確認してない。21•22番地•31番地南トレンチでは，南の丘陵に並行し堤とそれに伴う旧河道を確認した。これらの施設は，人工的なものである。まず，丘陵寄りにこれと並行する溝を掘削し，谷側では削り残した丘陵裾部の上に，河道の掘削によって得られた土砂を盛り土して堤を形成している。瀬後谷の開発に伴って水路を整備したものと考えられる。時期は，鎌倉時代から江戸時代の範囲と考えておきたい。堤の盛り土内への混入と，下層からは，比較的安定した地層から奈良時代の土師器・須恵器・布目瓦などがまとまった状況で出土した。出土した瓦の中には軒平瓦が含まれており，この文様から興福寺系の瓦と考えられる。16番地では，前記，21•22番地•31番地南トレンチで確認した南の丘陵に並行する堤とその旧河道を検出した。河道を埋めた土砂礫の中より布目瓦数点が出土した。これらの遺物は，上流からの流れ込みで，本来，上流(21•22番地付近と考えられる)に埋蔵されていたものが水路の開削に伴い露頭し，洗い流されて当地域に及んだものと考えられる。

まとめ

今年度は，瀬後谷遺跡における最初の調査であり，範囲確認と，その遺物包含層の状況



第4図　瀬後谷遺跡出土軒平瓦

の確認とに主眼を置いて谷部の調査を実施した。その結果，各地区で上記のような成果を得ることができた。特に21・22番地トレンチの下層からは，奈良時代の土師器・須恵器・布目瓦などが一括して出土した。このうちで特に注目される遺物として，興福寺系の軒平瓦6671I型式の瓦当があげられる。6671型式の瓦当の文様は，下外区に鋸歯文，脇外区及び上外区に楕円珠文を配し，内区蓮弁文を他の瓦と逆に配置するという特異な瓦である。今回出土した瓦当は，6671I型式の範疇に入るものである。6671I型式は，6671型式の内でも，上外区の楕円珠文を円形珠文とする特徴をもつ。今回の資料は，内区唐草文の外端の広葉「∧」を掘り直し，円形珠文にするという特徴をもち，さらに，脇外区上方の円形珠文の下部には楕円珠文が残るため，この部分も瓦笵の掘り直しの行われたことがわかる。

今回出土の瓦当は，当地域で初出例であり，興福寺系の瓦(6671I系を)生産した瓦窯が周辺部に存在することがうかがえる貴重な資料といえる。

c．瓦谷遺跡

はじめに

瓦谷遺跡は，市坂地区の南西に位置し，標高100mの丘陵から西に開く谷部と，その裾に広がる扇状地からなる。遺跡の周辺には，近年顕著な遺構が確認されている上人ケ平遺跡，周知の高塚である瓦谷古墳・上人ケ平1・5号墳が存在し，この地域が弥生時代から奈良時代にかけて集落・墓域・生産遺跡として盛んに活用されていたことが判明している。瓦谷遺跡に関しては，昭和61年度発掘調査を実施し，古墳時代の小型方墳・埴輪棺・遺物を多量に包含する流路などが確認され，不明な点の多かった当遺跡の実態が次第に明らかになりつつある。

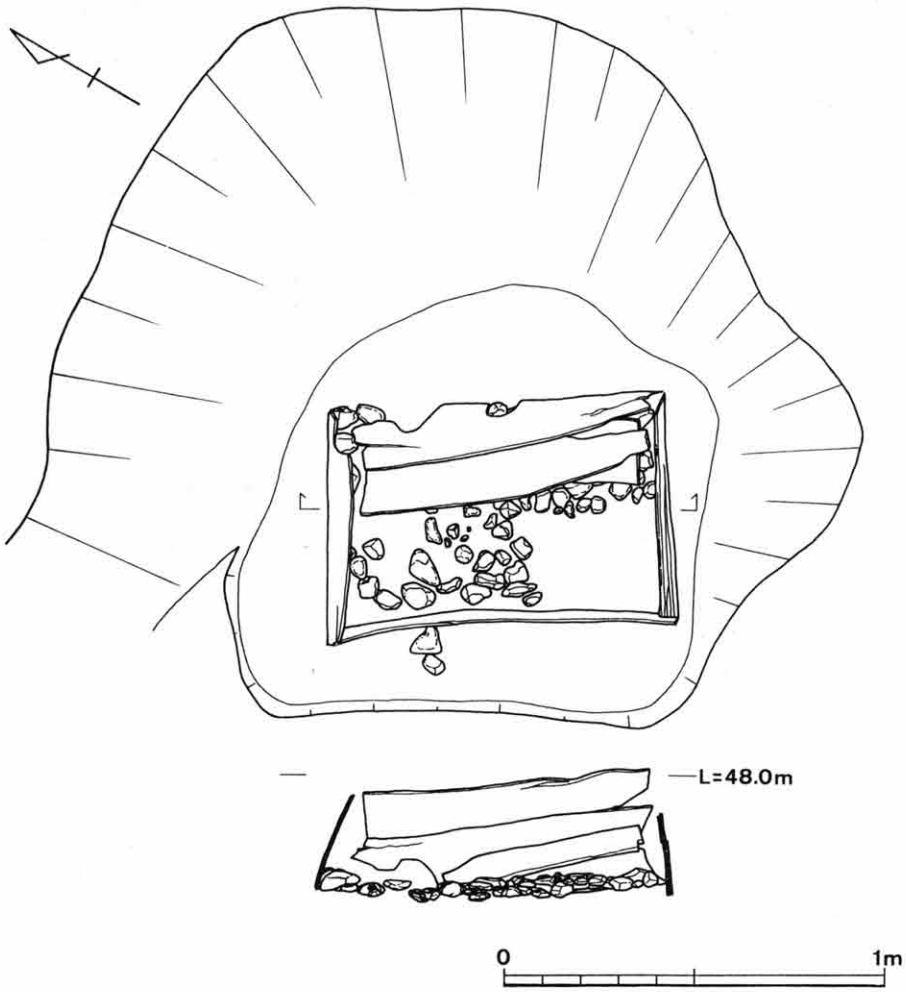
調査の概要

昭和62年度は，扇状地の中央付近で昨年検出した流路の下流側延長部(31・32・34・35番地)，および上人ケ平遺跡の立地する丘陵から派生する尾根に挟まれた谷部(上人ケ平4・瓦谷74番地)の2地区に計8か所のトレンチを設定して実施した。以下，今年度の調査の結果を概述する。

第5図　瓦谷遺跡調査地位置図（1/4,000）

31・32・34・35番地では，隣接する各トレンチ間でそれぞれつながりが想定できる中～小規模の流路状遺構を数条検出した。調査区内において樹枝状に分流を繰り返す複雑な平面形を示す。流路内埋土の状況から，流路として機能していたのは比較的短期間であり，その後急速に埋没したようすが窺われる。搬出遺物よりその下限を古墳時代（布留式並行期）に求められる。また，遺物こそ出土しなかったが，重複関係から，上記の流路に先行する時期の流路状遺構の存在も合わせて確認した。

74番地は，上人ケ平遺跡の立地する台地の北半に2筋開析されている小規模な谷地形の内，東側の谷の奥部に位置する。現状では，2筆の耕地として階段状に造成されており，上手からA区・B区としてそれぞれにトレンチを設定した。結果，A・B両地区で旧谷地形を検出し，厚く堆積した埋土中から保存状態の良好な遺物（瓦・土器・木製品）が出土した。谷の埋積過程は，下層の布留期（土器中心）・中層の奈良期（瓦中心）・上層の沼底状堆積（無遺物）と耕地の造成土および耕土に大別できる。B区では，中層の奈良期までに地表から4mの厚さを測り，奈良期の木組み井戸を1基検出した（SE7402）。旧谷地形の東側斜面に不整円形の掘形（径2.5m程度）を設けて構築している。現状では，斜面の再開析を受け大きく削平され，井戸側の最下段を残すのみであるが，本来は，斜面にテラスを形成して井戸への通路及び作業スペースを確保していたようすが斜面に残る段状地形から推測される。残存する井戸側は，土圧で内方へ倒れた東側が2段残る以外は下1段のみ残存する。その形状は，補強材を用いず側板のみで井戸側を構成する構造（横板蒸籠組）で，内法88cm×55cmのやや南北に長い規模を有する。この井戸側は，四隅の接合法（板の厚さと同じ長さの枘を交互に造り出して組み合わせる）・黒色顔料塗付・釘穴の存在・板厚（1cm）



第6図　瓦谷遺跡井戸(SE7402)検出状況図

等より櫃の転用と考えられる。井戸に伴う遺物は，わずかに井戸底敷石(拳大自然石を一時に敷設)上より有孔短冊形木製品・布目瓦片が出土したに留まるが，奈良時代の時期を想定して大過ない。

瓦谷4番地は，74番地の一筋西側の谷部に位置する。当地区は，1.5mの落差をもって段状に耕地化されている。ここでも重複する中～小規模の流路状遺構を数条確認し，庄内並行期～奈良期の遺物が出土した。

まとめ

今年度は，昨年度の平地部における顕著な遺構・遺物の検出をうけて，その範囲確認に主眼をおいた調査を実施した。その結果，各地区で上記のような成果を得ることができた。

特に，井戸の検出は，当地域では初出例であり，上人ケ平遺跡で検出した遺構群と合わせて考える上で貴重な資料といえる。

d．西山遺跡

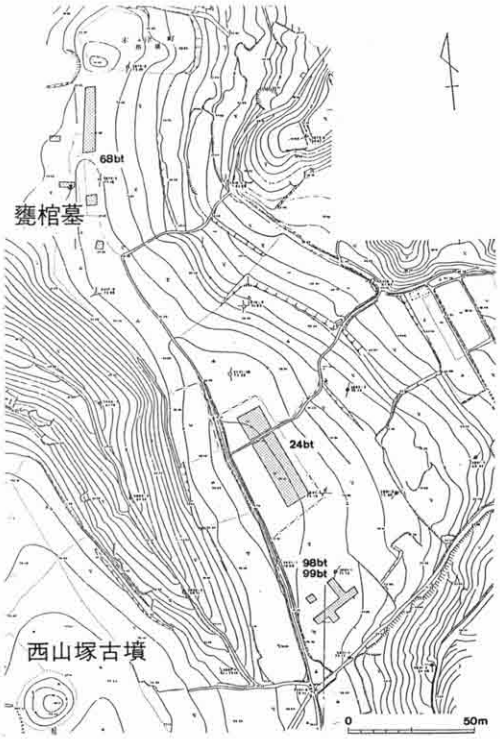
はじめに

西山遺跡は，木津川で形成された沖積地や対岸の丘陵が一望できる標高60～67mの丘陵上に位置している。その眺望や立地から，墓や住居を造営するうえで絶好な条件を備えた丘陵であるといえる。

今回の調査は，丘陵先端部から奥尾根にかけて24・68・98・99番地の4か所にトレンチを設定して行った。以下，各トレンチについて概観したい。

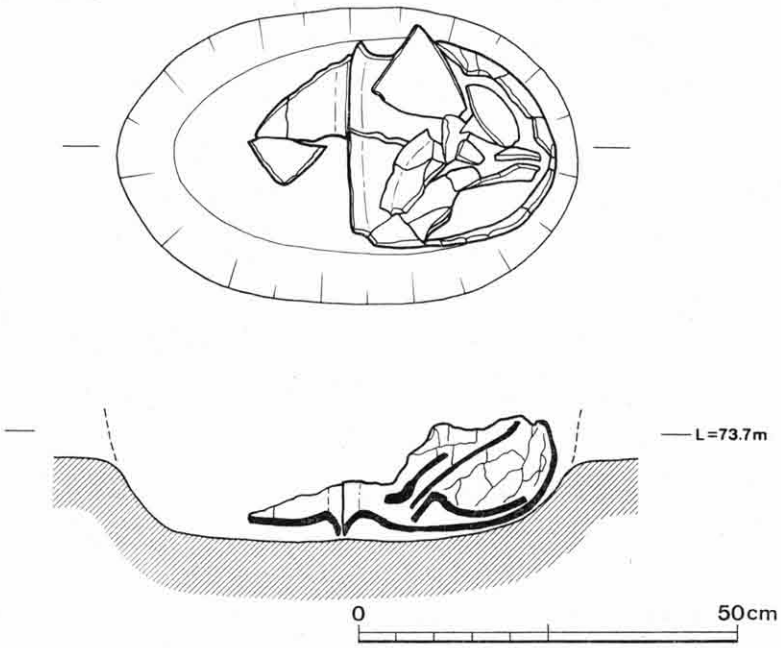
調査の概要

68番地は，丘陵先端に位置しており，5か所にグリッドを開けて遺構検出を行った。その結果，幅2m・深さ40cmの円形にめぐる溝の一部と土坑・ピット・土坑墓を確認した。円形にめぐる溝は暗茶褐色土を埋土とし，底面は平らである。溝内からの遺物は，溝の一部を完掘したのみであったため出土していないが，円形を呈していることから，古墳の周溝や排水溝の可能性がある。ピット・土坑は，時期・性格等については不明な点が多いが，奈良時代の遺物が散見できることから，何らかの遺構が存在したとも考えられる。土坑墓は，奈良時代の同型の甕を使用している。甕の胴部は長胴形を呈し，甕の口縁部を合わせたいわゆる合口甕棺墓である。棺内部からの出土遺物はない。なお，土器を転用した墓は，今後，トレンチを拡張することにより，その数が増える可能性が極めて高いといえる。



第7図　西山遺跡調査地位置図

24番地は，先述した68番地より尾根の奥に設定したトレンチである。トレンチ設定部分は，畑地であり，旧地形をある程度保っていると考えられる林道との高低差は60cmを測



第８図　西山遺跡　甕棺墓検出状況図（概ね左が北）

るため，当初から遺構の保存状態は悪いことが予想できた。調査によって，40cm前後の耕作土・置土を除去し，大阪層群礫層を検出した。礫層上面では古墳時代前期の土器底部のみが入ったピットを確認したが，大半は削平されたと考えられる。なお，耕作土中から古墳時代前期の土師器片が出土している。

98・99番地は，尾根の奥に設定したトレンチであるが，周辺が可視できる状況になく，住居等の選地に好条件とは言えない。トレンチ中央にて，竹林耕作地境溝を確認したのみである。

まとめ

今回の調査では，68番地で合口甕棺墓，24番地で古墳時代のピット等を検出した。周辺に同類の遺構が存在する可能性は高いと言える。

e．菩提遺跡

菩提遺跡は，井関川で形成された沖積地の南岸の微高地上に位置しており，墓や住居を造営するうえで好条件であったと考えられる。当遺跡では，過去に昭和60年度に周辺部で一度調査を行っている。今回の調査は，丘陵裾部で行った。

まとめ

今回の調査では，丘陵裾部と，谷部の地形を確認したのみで，遺跡の中心は開発対象地

域外に広がるテラス部であると考えられる結果を得た。

3. おわりに

木津ニュータウンの開発地内における発掘調査は，昭和59年度から開始され，今年度で4年になる。昭和59年度は，北部で赤ケ平遺跡・釜ケ谷遺跡，南部で上人ケ平遺跡・市坂1・4号墳の調査を行った。赤ケ平遺跡では，ピット・土坑などを検出し，弥生土器・石鏃などが出土した。調査は，丘陵の先端部の一部で行われたのみであり，今後，継続した調査が必要である。釜ケ谷遺跡では，谷の上流域で江戸時代の包含層を，中流域で古墳・奈良・鎌倉・江戸の各時期にわたる包含層を，下流域では，地表下3mまでの調査で鎌倉・江戸の各時期にわたる包含層を確認している。今後，中流域を中心とした調査が必要である。上人ケ平遺跡では，古墳時代の遺物包含層，奈良時代の掘立柱建物跡・溝などを検出した。上人ケ平1・4号墳の調査では，1号墳の周溝を確認した。

昭和60年度は，梅谷地区で古墳推定地3か所，遺物散布地4か所での調査を行った。この内，中ノ島遺跡の調査では，梅谷瓦窯に伴う奈良興福寺の創建瓦が多数出土した。梅谷瓦窯と合わせ，重要な遺跡と判断される。昭和61年度には，瓦谷遺跡・上人ケ平遺跡・古墳推定地2か所での調査を行った。この内，瓦谷遺跡では，丘陵上で小型方墳・埴輪棺を検出し，谷部では古墳時代の流路跡を検出した。上人ケ平遺跡では，台地の北半を中心に調査を行い，古墳時代前期の住居跡・壺棺墓・中期の小型方墳などを検出した。昭和62年度の調査は，「2. 調査の概要」でふれたとおりである。上人ケ平遺跡では，3か年にわたる試掘調査を行い，弥生・古墳・奈良の各時期の遺構が台地の全域に包蔵されていることが明らかとなった。昭和63年度からは本調査が開始される予定である。瓦谷遺跡では，昭和63年度の試掘調査をもって範囲確認調査が終了する予定である。瀬後谷遺跡では，興福寺系の瓦を生産した瓦窯が想定されており，昭和63年度に確認調査が行われる予定である。西山遺跡でも古墳・奈良の各時期の遺構が想定される結果を得ている。このように木津ニュータウンの開発される地内には数多くの文化財が埋蔵されていることが明らかになりつつある。

（とはら・かずと＝当センター調査第2課調査第3係主任調査員）

※瓦の型式認定については，奈良国立文化財研究所・毛利光俊彦氏をはじめ，考古第三調査室の方がたの御教示を得た。

昭和62年度発掘調査略報

22. 桑飼上遺跡第1次

所在地　舞鶴市桑飼上

調査期間　昭和62年7月6日～昭和63年2月10日

調査面積　約2,100m²

はじめに　この調査は，昭和62年度由良川改修工事に伴い行った試掘調査である。遺跡の位置する由良川水系は，近畿地方北部最大の河川であるが，これにより形成された自然堤防上には，舞鶴市教育委員会及び当調査研究センターが調査し，注目を集めた志高遺跡など縄文時代から江戸時代にまでわたる複合集落遺跡が，累々と連なっている。

今回の調査は，今後予定される河川改修工事の本格実施に先立ち，昭和60・61年度に行った確認調査の後を受け，遺跡推定範囲の下流約2/3について，遺跡の範囲・層序・性格・時代などを調べ，本調査の具体的計画をたてるために行った。

調査概要　調査は，50m間隔で，平面200m²前後のトレンチを12本設定し，必要に応じて拡張した。以下，主な調査の成果について述べる。

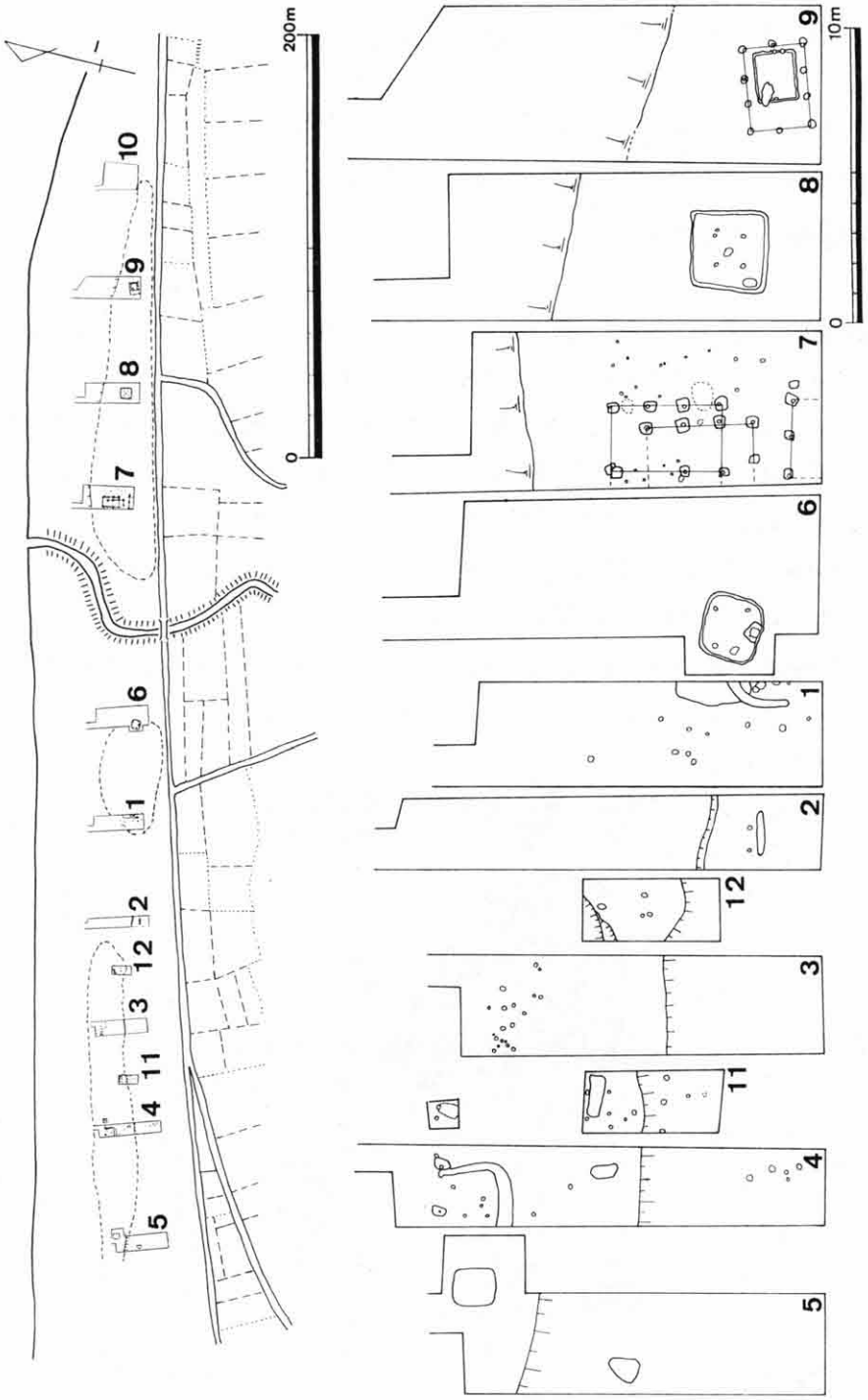
1～5トレンチでは，南半部の沼状地形から弥生時代中期から奈良時代の遺物が出土した。トレンチ北端及び11・12トレンチでは，弥生時代後期の土坑・ピット群を検出した。

一方，下流側の6～9トレンチでは，度重なる由良川の浸食にもかかわらず，遺構面が残存し，古墳時代前期から奈良時代にかけての竪穴式住居跡・掘立柱建物跡群を検出した。とりわけ，7トレンチで検出した掘立柱建物跡群は，1辺80cm前後の方形掘形をもち，柱痕径は，最大30cmを超え，柱間距離は，2.4m前後を測る大規模なものである。奈良時代に比定できる。

まとめ　このように，桑飼上遺跡は，他の例にもれず，長期間にわたる複合集落遺跡であることが明らかとなった。今後，この点を踏まえた上でさらに遺跡の範囲を限定し，各時代における遺構の性格を検討していかなければならない。

（細川康晴）

第1図　調査地位置図（1/50,000）



第2図　トレンチ配置図

23. 福 垣 北 古 墳 群

所 在 地　綾部市豊里町

調査期間　昭和62年11月５日～昭和63年３月８日

調査面積　約1,600m^2

はじめに　福垣北古墳群は，以久田野古墳群の北西端に位置し，近畿自動車道舞鶴線に伴う調査として，当調査研究センターが発掘調査を実施したのである。

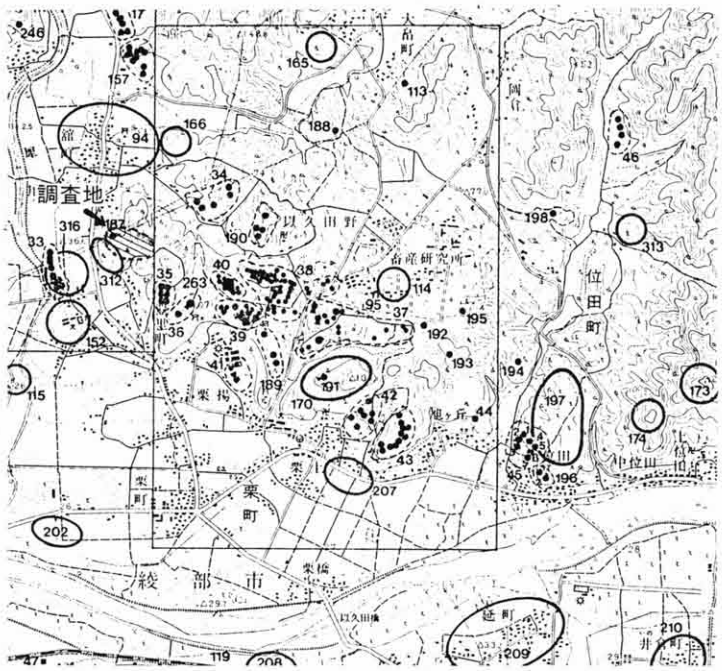
この以久田野古墳群は，前方後円墳４基を中心に円墳を主体とした，総数約120基ともいわれる丹波地方最大の大型群集墳であり，５世紀後半に古墳群の築造を開始し，６世紀に盛行，７世紀前半には終焉をむかえると考えられている古墳群である。(注1)

今回調査した福垣北古墳群は，以久田野古墳群の一端にあり，以久田野古墳群の性格を知る上での良好な資料となる古墳群の調査である。

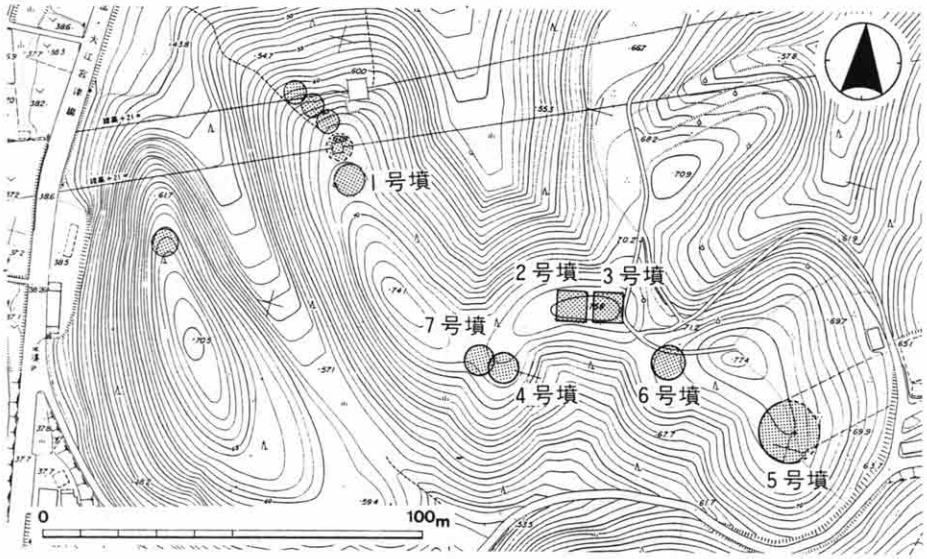
調査の概要　福垣北古墳群は，分布および試掘調査の結果，11基の古墳を確認した。そして昭和62年度は６基の古墳を対象として発掘調査を行った。

発掘調査で確認した各古墳の概略については，付表１に譲り，ここでは第２・第３号墳とその周辺埋葬施設を中心に記述を行う。

第２・第３号墳は，今回の調査対象地の最高所に立地する方墳であり，第２号墳と第３号墳は丘陵に直交する形で掘られた上面幅約3m・深さ



第１図　福垣北古墳群調査地位置図（『京都府遺跡地図』より転図・加筆）



第2図　福垣北古墳群地形図

約0.8mの溝(SD01)によって区画されている。

第2号墳は，SD01の西側にあり，墳丘規模は自然地形をそのまま利用しているため，北・南・西側の墳丘基底部は明瞭でない。第2号墳の墳頂部には，東西約8m・南北約6mの平坦部があり，その平坦部の北側に偏して中心埋葬施設がある。この中心埋葬施設は木棺直葬であり，棺は組み合わせ木棺と思われる。中心埋葬施設から出土した遺物は，墓坑の上面で土師器の細片(器種不明)が散在しているほか，棺外の墓坑内から鉄斧が1点，棺内から鉄剣が1点，鉄鏃が14点以上出土した。

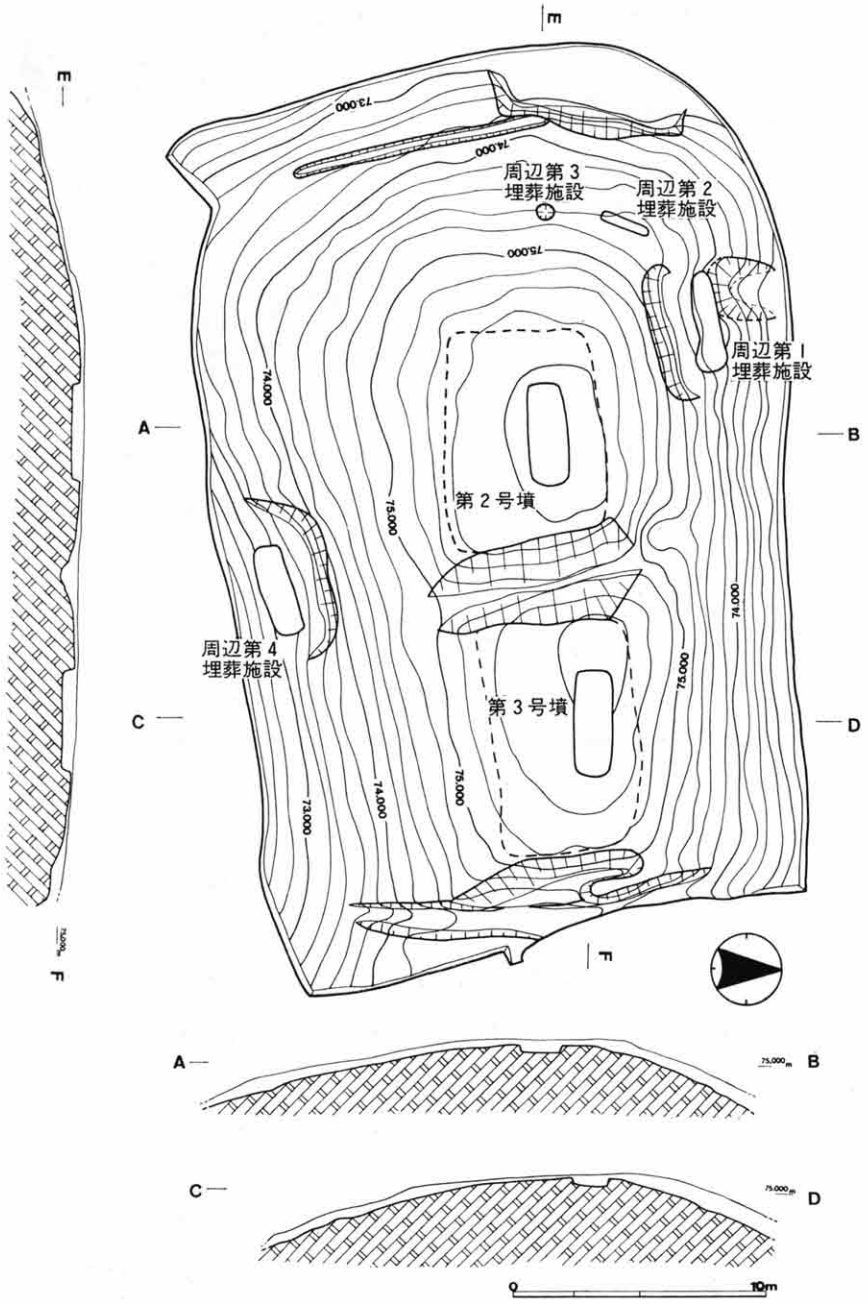
棺内の鉄製品の出土状況は，棺の東半部の南に接して鉄剣が剣先を東に向けて置かれ，鉄鏃は棺の西半部で，棺の西小口部に隣接して柳葉鏃(11本以上)が刃を西に向け，また三角形鏃が柳葉鏃群より東約70cmのところに，刃を東に向けて置かれている。

第3号墳は，墳丘の東側に丘陵に直交する形で溝(SD02)が掘られており，SD01とSD02の心々距離で測れば，第3号墳の規模は約18mを測る。

第3号墳の墳頂部には，東西約9m・南北約6mの平坦部があり，第2号墳と同様，北に偏して中心埋葬施設がある。中心埋葬施設は木棺直葬であり，棺は「工」形の組み合わせ木棺と思われる。

第3号墳の中心埋葬施設から出土した遺物は，棺の上面から須恵器壺(瑞？)・高杯が破砕した状態であり，棺内からは鉄器片が出土したが器種は不明である。

第2・第3号墳の墳丘の調査では，墳丘斜面から須恵器が出土し，その周辺を精査したところ，墓坑を確認した。以下，これらの墓坑を第2号墳に伴う周辺埋葬施設と考え，そ



第3図　福垣北第2・第3号墳墳丘図

の説明を行う。

周辺埋葬施設は，第2号墳をとりまくようにあり，第2号墳の北斜面にあるものを周辺第1埋葬施設，北西斜面にあるものを周辺第2埋葬施設，西斜面にあるものを周辺第3埋

葬施設，SD01の南延長にあるものを周辺第４埋葬施設とした。

このうち，周辺第２・第３埋葬施設については遺物を含まず，墓坑の規模も小形であるため，埋葬施設として位置づけてよいかどうか疑問の残るものである。

周辺第１埋葬施設は，第２号墳の墳丘斜面に幅約5mにわたって墳丘をカットし，平坦面をつくる。そしてその平坦面に長軸約3.8m・短軸約1.15mの墓坑を掘り，その墓坑内に棺を設置したもので，棺は組み合わせ木棺と思われる。

周辺第１埋葬施設から出土した遺物は，棺の上面から須恵器甕が，棺内には棺の西半分に集中して勾玉１点，小玉300以上が出土した。

周辺第４埋葬施設は，第２号墳と第３号墳を区画する溝(SD01)の南延長線上にあり，周辺第１埋葬施設と同様，墳丘斜面を幅約7mにわたって墳丘をカットし，平坦面をつくる。そして，その平坦面に長さ約4m・幅約1.4mの墓坑を掘り，その墓坑内に棺を設置する。棺は組み合わせ木棺であり，棺の推定長は約2.3m・幅約0.5mを測る。遺物は棺の上面から須恵器甕のほか土師器片が，棺内からは東半分に集中して小型仿製鏡(文様不明)・瑪瑙製勾玉３・碧玉製勾玉９・ガラス小玉20以上が出土した。

おわりに　昭和62年度における福垣北古墳群の調査は，第２・３・４・５号墳の４基の古墳を対象に調査を行い，昭和63年度も継続して調査を実施する予定である。そのため，ここでは第２・第３号墳についてのみ気づいたことを列記し，次年度以降，その詳細については検討していきたい。

第２・第３号墳は，自然地形を利用して墳丘を成形したもので，第２号墳と第３号墳は，溝によって区画された方墳である。第２号墳と第３号墳は，木棺直葬墓を中心埋葬施設とし，第２号墳は中心埋葬施設をとりまくように墳丘斜面に周辺埋葬施設がある。

出土遺物は，各埋葬施設とも土器・鉄器・玉類などがある。このうち，須恵器は初期の須恵器の古墳への副葬例がそうであるように，棺の上面に完形あるいは破砕した状態で出土しており，各須恵器の器種は無蓋高杯・壺・甕などである。この須恵器の器形・調整技法の特徴より，田辺編年(注2)のTK73～TK208型式に相当し，５世紀中葉～５世紀後半の時期と考えられ，第２・第３号墳の中心埋葬施設が古く，１型式～２型式において周辺埋葬施設が築造されると考えられる。

この福垣古墳群を以久田野古墳群のなかで考えると，前述のように以久田野古墳群は５世紀後半に築造を開始し，７世紀前半まで連綿と続く総数約120基の古墳群と考えられていたが，その築造時期が５世紀中葉にまで遡る。また，以久田野古墳群の築造当初の古墳群が現在のところ，福垣北古墳群に集中して認められることは，以久田野古墳群の成立を考える上で注目される古墳群であると思われる。　(石井清司)

注1　平良泰久「綾部市以久田野古墳群」(『京都考古』第6号，京都考古刊行会)　1974年
平良泰久「綾部市以久田野丘陵遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1975年
常盤井智行ほか『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』山城考古学研究会　1983年

注2　田辺昭三『須恵器大成』平凡社　1981年

福垣北古墳群検出遺構一覧表

名　称	外形・規模	埋葬施設	出土遺物	備　考
福垣北第2号墳	方墳 東西15m？×南北17m？	組合せ木棺 墓坑；長軸3.9m×短軸1.6m 棺；長さ2.6m×幅4.5m	棺内；鉄鏃13本・鉄剣1刀 墓坑内；鉄斧 棺上；土師器 墳丘斜面；須恵器樽形甕 TK216～TK208	墳形は自然地形を利用しており，墳丘基底は不明瞭
福垣北第3号墳	方墳 東西18m×南北16m？	組合せ木棺 墓坑；長軸4.0m×短軸1.45m 棺；長さ2.3m×幅70～80m	棺内；鉄器片 棺上；須恵器壺(あるいは甕)・壺(須恵器は棺上に壊した状態で出土) TK73～TK216	第2号墳と同様，自然地形を利用しており，南北の墳丘基底部は不明瞭，東西は丘陵に直交する溝により区画
福垣北第2号墳周辺第1埋葬施設	第2号墳の北斜面に平坦部を造り，墓坑を掘る	組合せ木棺 墓坑；長軸3.8m×短軸1.15m 棺の規模は不明	棺内；勾玉1・小玉300以上 棺上；須恵器甕 TK216～TK208	
福垣北第2号墳周辺第2埋葬施設	第2号墳の北西斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳周辺第3埋葬施設	第2号墳の西側斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳第4埋葬施設	第2号墳の南側斜面に平坦面を造り，墓坑を掘る	組合せ木棺 墓坑；長軸3.65m×短軸1.2m 棺；長さ2.3m×幅0.5m	棺内；小型仿製鏡・瑪瑙製勾玉3・碧玉製管玉・ガラス小玉 棺上；須恵器甕・土師器 TK216～TK208	
福垣北第4号墳	円墳 推定11m 周溝がめぐる	不明	周溝内より円筒埴輪出土 川西編年のⅣ期	第4号墳は削平を受け主体部および墳丘は残っていない。一部周溝がめぐるのみである
福垣北第5号墳	円墳 径約20m 周溝がめぐる	割竹形木棺 墓坑；長軸6.2m×短軸2.15m 棺；長さ4.5m×幅0.5m	なし	

24. 青野遺跡第13次

所在地　綾部市青野町吉美前

調査期間　昭和62年10月26日～昭和63年2月25日

調査面積　約630m²

はじめに　青野遺跡は，綾部市街地の北方，由良川南岸の自然堤防上にある広大な集落遺跡である。時期的には，弥生時代中期から奈良時代までを主とする複合遺跡である。この遺跡では，これまで，綾部市教育委員会・当調査研究センターなどが，12次にわたって調査を行っている。

今回の調査地は，青野遺跡の西端部にあたる。また，昨年度当調査研究センターが調査した第11次調査地の西側に隣接している。

第1図　位置図(1/25,000)

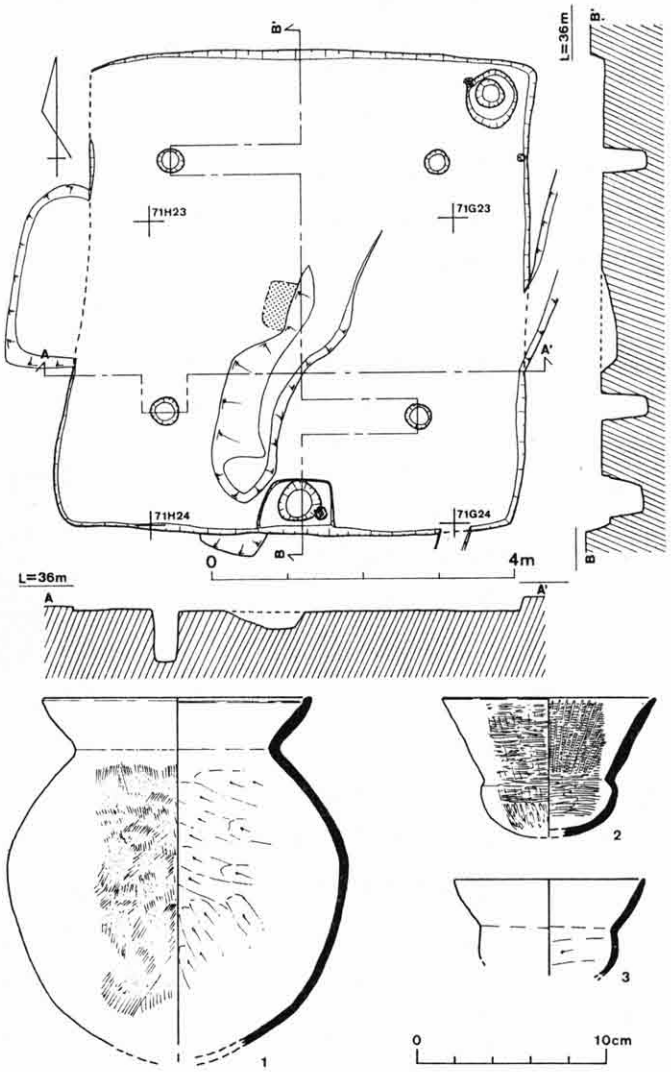
調査概要　今回検出した遺構は，竪穴式住居跡1基と溝7条・土坑3基である。遺構の分布状態はまばらである。今回の調査地の西側には，由良川の旧流路が想定されている。調査地内の遺構検出面は，西側に向かって緩やかに傾斜して下降している。また，住居跡や土坑などは調査地東側部分にあり，調査地中央から西側部分では溝のみである。このような状況からみて，今回の調査地は，旧由良川の右岸付近にあたり，生活区域となっていなかったものとみられる。

検出遺構のうち，溝4条と土坑2基は，確実に伴う出土遺物がなく，時期不明である。時期のわかる遺構は，弥生時代中期と古墳時代前期に属する。

弥生時代中期の遺構としては，溝2条と土坑1基がある。溝からは，凹線文をもつ台付鉢や壺などが，まとまって出土している。畿内第Ⅳ様式並行のものとみられる。土坑は，長楕円形のもので，今回の調査地付近でも過去の調査で類似のものが多数検出されており，墓と推定されている。

古墳時代の遺構は，竪穴式住居跡1基と溝1条である。溝は，調査地を南東側から北西側に向かって横切るもので，底部から畿内布留式並行期の土器が出土している。また，時期的には検討を要するが，方向的には，今回の調査地南東側の第1次調査地(青野A地点)で検出された「溝1」の延長の可能性がある。

竪穴式住居跡は，一辺6mの方形の平面形をもつ。周壁溝はない。南辺中央に，上部を方形，下部を円形に，二段に掘り込んだ土坑(「特殊ピット」)がある。また，北東隅にも円形に二段に掘り込んだ土坑がある。柱穴とみられるピットが4か所にあり，中央部には焼土が残る。この住居跡からは，畿内布留式並行期の甕・小型丸底土器などが出土している。これらの土器は，上記の溝出土の土器と比べて，やや古式であり，第2図-2の小型丸底土器のように，胎土・調整ともに在地的な様相がうすいものもある。このような土器は，青野遺跡では初出である。



第2図　竪穴式住居跡・出土遺物実測図

まとめ　今回の調査では，検出遺構こそ少なかったものの，青野遺跡の弥生時代中期から古墳時代前期頃にかけての居住区域・墓域の西限を，局部的ではあるが，知ることができた。また残存状態の良好な弥生時代中期の土器や，住居跡出土の畿内布留式並行期の土器など，良好な土器資料にもめぐまれた。青野遺跡が，由良川中流域有数の集落遺跡であることを，あらためて実感する。

(引原茂治)

25. 千代川遺跡第13次

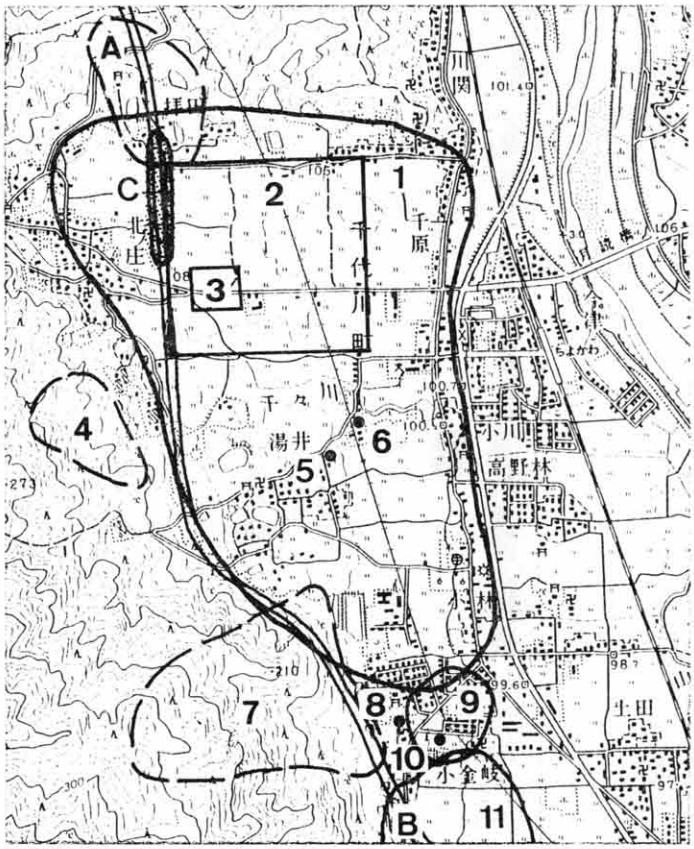
所 在 地　亀岡市千代川町北ノ庄堂ノ後他

調査期間　昭和62年5月19日～昭和63年2月26日

調査面積　約6,200m²

はじめに　千代川遺跡は，亀岡市千代川町に所在し，亀岡盆地を南北に貫流する大堰川西岸の行者山北東に形成された扇状地上に位置し，東西約1.2km・南約1.6kmに及ぶ。

今回の発掘調査は，国道9号バイパスの建設に先立ち実施した。バイパスの予定路線は，京都市右京区大枝沓掛町から亀岡市・八木町・園部町を縦貫して丹波町須知に至るものである。このバイパスは，千代川遺跡の周辺では遺跡の西半部を南北に縦断し，拝田丘陵にある拝田古墳群の間を抜けるように計画され，当調査研究センターでは，昭和59年度から継続して発掘調査を実施している。今年度は，国府推定域の西辺部を対象としており，国府に関係する遺構・遺物の検出が期待された。

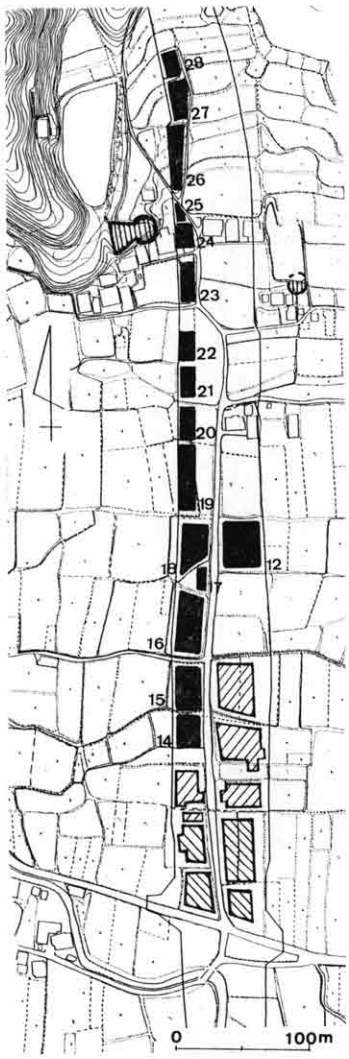


第1図　調 査 地 位 置 図 (1/25,000)
1. 千代川遺跡　2. 丹波国府跡推定地　3. 桑寺廃寺　4. 北ノ庄古墳群　5･6. 丸塚，丸塚西古墳　7. 小金岐古墳群　8. 馬場ケ崎1号墳　9. 馬場ケ崎遺跡　10. 馬場ケ崎2号墳　11. 北金岐遺跡
A～B：バイパス予定路線　C：今回の調査地

調査概要　調査は，対象地内に16か所

(No. 12•14～28)の調査区を設定し掘削を進めた。各調査区は，全体に後世の削平が著しく，良好な状態で遺構を検出できなかった。以下，確認した遺構や出土遺物から判明した調査成果を，大きな時代に区分して報告する。

古墳時代以前　今回の調査では，古墳時代以前にまでさかのぼる遺構は確認し得なかった。だが，出土遺物の中には，縄文土器片３点，弥生土器片10数点，有舌尖頭器２点などを認めることができた。古墳時代の遺構として，古墳時代前期に属する自然流路跡(No.15•16)や土坑(No.15•16)がある。特に，No.16区より検出した自然流路跡の最下層からは壺••甕・高杯などの多量の破片とともに埴輪片も出土した。



第２図　トレンチ配置図

奈良～平安時代　遺構としては，No.14•15区で掘立柱建物跡を３棟，No.21区で溝を１条，No.22区で井戸跡を１基，No.23区で溝を１条検出した。掘立柱建物跡３棟は，いずれも同一方向を向き，時期的には８世紀中葉頃のものと思われる。これらは，第12次調査のNo.9区で検出した建物跡群と同一方向である。No.21区で検出した溝は，国府推定域外で確認したものである。現在でも確認できる堀状落ち込み(国府の北限？)の延長上にあたる。また，No.16区の鎌倉時代の遺物を多く包含する自然流路跡の土層中から,「承和七年三月廿五日」(840年）と年号のある木簡が出土した。

鎌倉時代　No.12区で２棟，No.15区で２棟の掘立柱建物跡と，多数の溝を確認した。溝は，建物跡と重複し，幅約0.３m・深さ約0.２mを測る。時期は，建物跡が12世紀末～13世紀初め頃，溝群が13世紀後半～14世紀初め頃と考えられる。木簡が出土したNo.16区の自然流路跡の堆積土のほとんどは，この時期の遺物を包含する。そのため，この流路が完全に埋没したのも，この頃であることがわかる。また，No.23～28の拝田丘陵の谷部では建物跡等を検出できなかったが，この時期の遺物はかなり出土した。そのため，国府推定域外でも遺構の広がりが予想される。　(鵜島三寿)

26. 長岡京跡右京第285次（7ANIFC地区）

所 在 地　長岡京市今里更ノ町29・30

調査期間　昭和62年11月12日～昭和63年３月５日

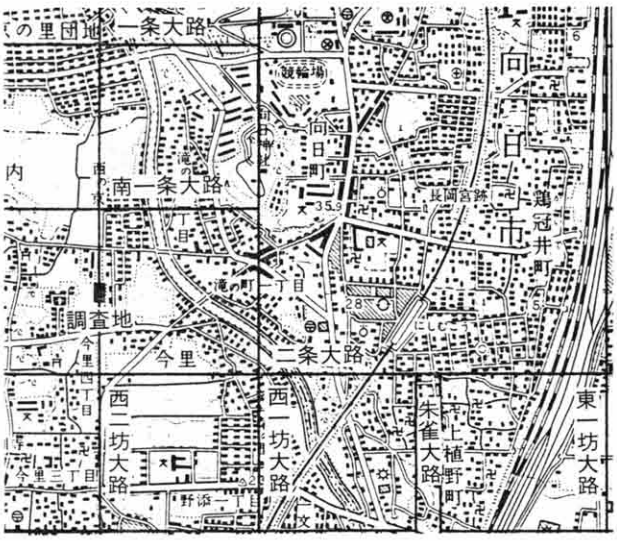
調査面積　約900m²

はじめに　この調査は，都市計画街路（外環状線）改良工事に伴うものである。外環状線の発掘調査は，昭和52年以来，京都府教育委員会・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターが断続的に行っている。

調査対象地は，長岡京の条坊復元によれば，右京二条十四町および西二坊大路・二条条間大路の推定地に位置する。また，弥生時代から中世にかけての集落跡である今里遺跡の北辺にあたる。当地は，長岡京市井ノ内・今里にかけて南北にのびる段丘の東側で，扇状地形をなしており，水田面の標高は30ｍ前後となっている。

調査概要　今回の調査で検出した遺構には，水田耕作に伴う近世の野井戸・土坑，中世溝，土坑（時期不明），掘立柱建物跡（長岡京期前後），長岡京西二坊大路東側溝・二条条間南側溝（推定），方形周溝墓，自然流路などがある。

近世の野井戸は，西二坊大路東側溝と推定二条条間大路の交差点付近で検出した。井戸の底から平城宮式6227A型式の軒丸瓦(1)が出土した。



第１図　調査地位置図（1/25,000）

調査地のほぼ全域で南北方向にはしる中世溝を検出した。この溝のひとつから13世紀前後と推定される白磁が出土した。

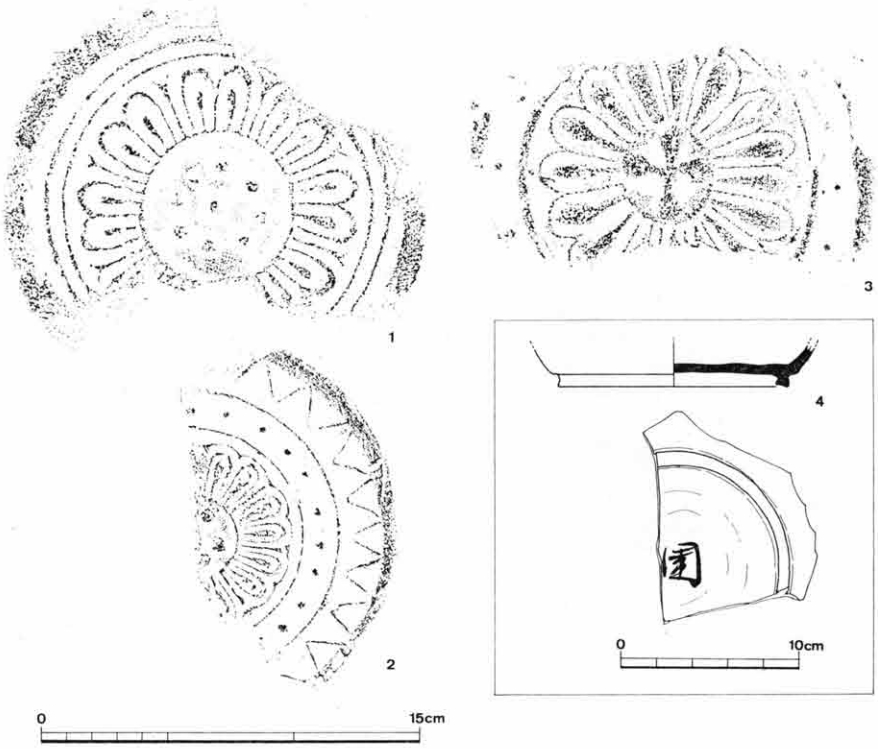
西二坊大路東側溝は，調査地の東側で南北に長さ約38ｍにわたって検出した。溝幅0.8～1ｍを測り，深さ0.2ｍ前後ある。北端がわずかに蛇行している。二条条間大路南側溝（推定）は，北方部の一段低い場所で検出

した側板を持つ東西方向の溝である。溝の両側に杭を打ち込み側板で護岸している。これより南では，東西溝が検出されず，二条条間大路の推定位置にあたるため，現在この溝を南側溝と推定している。

西二坊大路の道路面では，東西５間×南北２間で東西方向の掘立柱建物跡を検出した。柱間は，東西方向の中央が約2.4m(８尺)を測り，他は約2.1m(７尺)等間である。柱掘形から石・瓦・土器が出土し，その遺物から長岡京期前後と推定できる。この建物跡の南でも，廂の可能性がある柱列・掘立柱建物跡などを検出した。

自然流路を，近世の野井戸，二条条間大路南側溝を検出した場所から北側で検出した。この流路は，北西から南東方向に流れており，その痕跡が水田の段差にうかがえる。この流路を埋め立てた後に，二条条間大路南側溝を造っている。埋め立てた黒褐色土層の下層には，奈良時代の土器が多量に含まれていた。

出土遺物には，各時代のものがある。自然流路の埋土および埋土上面から木簡・齋串・墨書土器・軒丸瓦・木製品などが出土した。墨書土器には，「園」と判読できるもの(4)３点をはじめ合計20点以上ある。長岡宮式7133Ec軒丸瓦(3)は，長岡京市の谷田瓦窯で焼かれたもので，京域では初めての使用例となる。　　(石尾政信)



第２図　出土遺物実測図・拓影

全伽倻解明の貴重な鍵

—金海・七山洞古墳群発掘調査の成果—

申　敬　澈

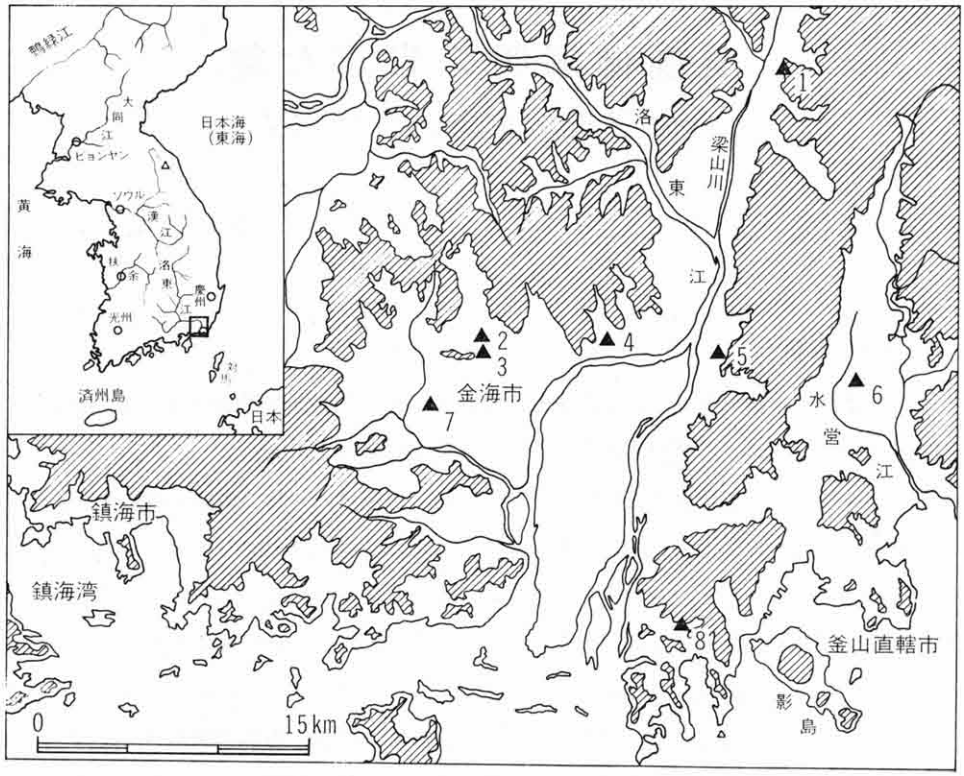
1. 発掘の動機

金海地域は，周知のように，伽倻連盟の盟主国であった金官伽倻国(または本伽倻国)が位置していたところで，我国古代史上に占める比重は極めて大きい。

それにも拘らず，文献史料の絶対的不足のため，伽倻は，当時の新羅・百済・高句麗などの歴史に較べて，常に「忘れられた歴史」あるいは「謎の歴史」でとどまっていると言っても差支えないほど，我国古代史にあって，大きな「ジレンマ」であると言えよう。こうした文献学的な空白部分を埋めるためには考古学的方法による研究が最善の道ではあるが，今日までの金海地域における考古学的成果を緻密に分析すると，結局，本地域の重要性に符合した成果を得てきたとは言えない。それは他の理由にも基因することではあるが，何よりも根本的な原因は，本地域での考古学的調査が既往の固定観念に因われて実施されてきたためと考えられる。言うなれば，日帝時代以後現在まで，古代において，数地域の政治的・社会的あるいは文化的な中心的集団の実態を究明するにあたって，外観上長大な高塚古墳にのみ焦点を定めて発掘に精力を注ぐ傾向が強かった。それは一方では正しいことではあるが，金海地域は，実際，伽倻諸地域，または新羅・百済の故地とは異なり，群集して台状封土をもつ円墳(すなわち高塚古墳群)が存在しない根本的な問題を有しているにも拘らず，こうした方法に固執することは，金官伽倻国の実態と文化の端緒を見い出すには，より古い段階の古墳を調査し究明しなければならないと言う考え方を指す。

そのため，筆者は，従前に金海地域で実施された発掘成果についての分析と，分布調査で採集した遺物を詳細に検討した結果，上記の目的に合致した最良の遺跡が，慶尚南道金海市七山洞11-1番地，及び花木洞山16-21番地一帯に所在する，七山洞古墳群であると言う確信をもつに至った。

よって当大学博物館では，全伽倻の出発点になる金官伽倻文化の究明のみならず，全伽倻史の解明に対する第一歩は，明確な目的意識の下に，発掘調査団(団長卞麟錫博物館長)を組織して本古墳群を正式に学術調査することとし，大学当局から発掘調査費の全額支給を受けて，1987年8月10日から10月26日までの約80日間にわたって発掘調査を実施した。



主 要 遺 跡 分 布 図

1. 梁山夫婦塚　2. 伝首露王陵　3. 金海貝塚　4. 礼安里古墳群
5. 華明洞古墳群　6. 福泉洞古墳群　7. **七山洞古墳群**　8. 槐亭洞古墳群

筆者は，現在鋭意整理・検討中ではあるが，当初「期待した以上の成果」を上げたものと思っている。以下，その成果の意義について略記することにする。

2. 遺　　構

本遺跡は，3世紀後半代～7世紀に造営された古墳群であることが，今回の調査で明らかになった。発掘調査は2区域に分けて実施した。一か所はこの遺跡の頂上部に位置する石室墓地域で，本地域は，遺構の性格上，今回の発掘目的とは若干性格を異にしており，ひとえに本古墳群全体を把握する上で補完的なものであった。本地域を第Ⅱ区と名付けた。第Ⅱ区からは，6世紀前葉と考えられる竪穴式石室墓4基と，これら石室墓の内の1基を破壊して後代に築造された6世紀中葉の横口式と推定される石室墓1基，及び合口式甕棺墓1基，計6基の墳墓が検出された。このうち1基は，盗掘の被害を蒙っていたにも拘らず，予想以上に遺存状態が良好で，出土遺物も多かった。本地区の調査で再三再四確認できたのは，洛東江下流域における横口式石室の出現が，結局，6世紀中葉を遡らない点で

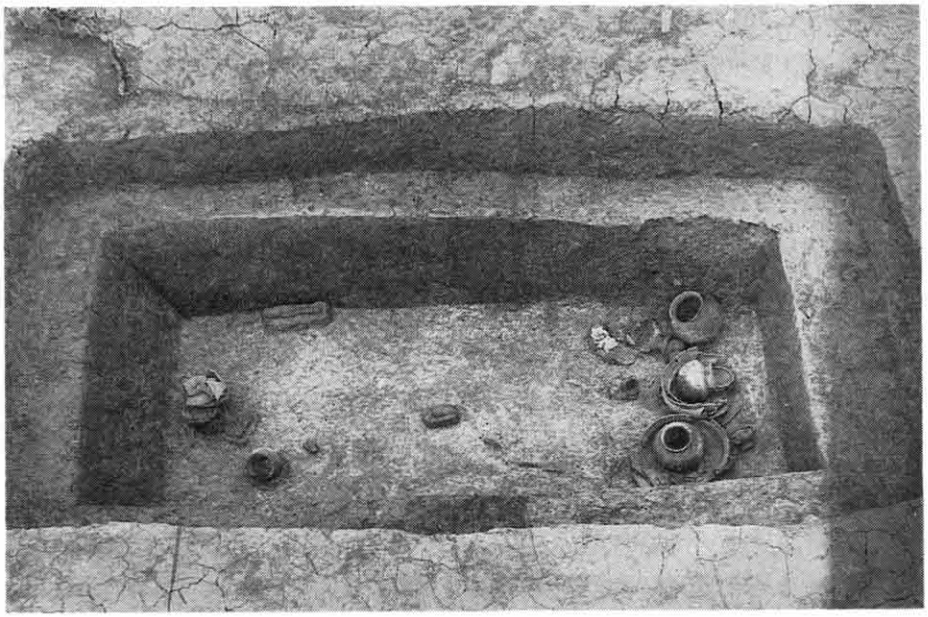
ある。この点は年代的には伽倻の滅亡時期と一致するが，こうした現象は，当時の歴史的状況と結び付けて，積極的に検討してみるだけでは問題解決にはならない。

筆者が今回心血を注いで調査を行ったのは第Ⅰ区である。本地区は第Ⅱ区より少し離れた斜面地で，発掘面積は100坪前後にすぎないが，木槨墓23基，石室墓5基，土坑墓と甕棺墓各々2基，総計32基を数える多くの墳墓が密集していた(図版参照)。

石室墓は，1基以外，4基すべてが6世紀代に属し，石室は，半地下式で破壊されやすく，壁面下段の一部が辛うじて残存していたにすぎず，横口式石室墓の可能性が高い。他の1基は，今日まで嶺南地方で発見された竪穴式石室墓中，最古式に属するものの一つで，築造法が釜山・華明洞古墳群の石室と相通ずる。年代は，出土遺物から観て，4世紀末と推定される。従って，この竪穴式石室墓は，竪穴式石室墓の発生年代や系譜など種々の問題点について，昨今までの通念を大幅修正せざるを得ない重要な資料であると考えられる。これについては後述する。

土坑墓2基は，6世紀代に属し，墓坑が大変細長い点が極めて特異であり，本地域で新たに確認された形式である。今後，6世紀代の墓制に対する研究において，大変重要な資料になるものと考えられる。甕棺墓2基は小児用で，本地域で数多く知られている墳墓形式である。6世紀前半代と推定される。

今回の発掘調査の中心は木槨墓であった。木槨墓は，上記した石室墓・土坑墓・甕棺墓の下層に造営されていた。木槨墓とは，本来，土坑墓と呼称されてきたもので，筆者は，



第Ⅰ区1号墳主槨全景

内部主体が木槨である場合，木槨内に何らの施設をも有しない土坑墓とは厳密に区別して，木槨墓と名付けている。これは，墓制の系譜のみならず，文化の源流を体系化するには極めて重要であると考えるためである。それは別にしても，今回調査した木槨墓は，概ね3世紀後半から5世紀初頭にわたり，各々が重複して築造されていた。5基が各々重複する特異な例もあり，この年代幅は，筆者が今日まで各論考で提示してきた年代観では，100年前後であり，墳墓の相対的な先後関係及び変遷過程に対する研究はもちろん，今後，各木槨墓から出土した遺物の整理が終了すれば，より緻密な土器編年等の確立に貢献することは間違いない。木槨墓は，時代の流れとともに，その墓形の変化も看取できる。とすれば，初期段階の木槨墓は，主体部が浅く，墓坑の幅が広い。それに対し，新しくなるにつれ，主体部は深くなる一方，墓坑の幅も狭くなっていく。すなわち本古墳群の最古段階の木棺墓の墓形態は，所謂原三国時代の遺跡に比定される慶州・朝陽洞遺跡の土坑墓や，あるいは釜山市・老圃洞遺跡のそれと酷似していると考えれば，と理解したい。

一方，一定の距離を置いて造られ，副葬品のみを納めた副槨をもつ，完全な台形木槨墓2基を調査したが，主槨と副槨が一列に配置された形式であった。また主槨の底面が深いのに較べて，副槨は浅い。この点は，金海・礼安里古墳群の4世紀代，あるいは東萊・福泉洞古墳群の5世紀前半代の同形式の木槨墓の特徴と同じである。

3. 出土遺物

出土遺物中，主体を占めるのは土器類と鉄器類であり，このうち今回の発掘目的に沿ったものは，第Ⅰ区木槨墓出土の遺物である。

特に木槨墓出土の土器類は，最近，新資料として脚光を浴びている瓦質土器を始めとし，古式の陶質土器など，それこそ珠玉のような土器類が多量に出土した。

瓦質土器は，丸底短頸壺と把手付長胴甕が主で，3世紀及び4世紀前半代の土器製作技法を究明できる明品である。また，この土器の研究を通しても，当時の文化的復原とその背景を推測できる資料として注目される。

木槨墓出土の陶質土器類には，高杯，小形広口丸底壺，小形器台，丸底短頸壺，有蓋台付直口壺，把手付椀，爐形器台など，各種各様の土器が含まれている。特に重要なことは，これらの土器は陶質土器出現期のものであり，未だ学界で異論の多い伽倻・新羅土器の発生年代の確定に大きく貢献できる良好な資料であると言う点，また，本地域の独創的な土器文化を示す明品で，金官伽倻地方は既に4世紀代には高度な文化をもっていた先進地域であったことを示唆している点である。加えて看過できない点は，木槨墓の切り合い関係から，瓦質土器文化が陶質土器文化より先行していることが明確になり，瓦質土器文化論

に対する学界の疑問点のひとつはこれで解消されるに至ったことである。

一方，第Ⅰ区及び第Ⅱ区の石室墓からも，有蓋高杯，丸底長頸壺，台付長頸壺，把手付椀など，6世紀代の陶質土器が多量に出土した。これら土器類は，木槨墓出土土器類が陶質土器文化の最高水準を示している精巧品であるのに反し，粗製品であることが注目される。このことは，当時，伽倻諸国が急激に衰退していく時期，あるいは終焉を迎える時期に相当し，こうした政治的・社会的変化が当時の遺物に反映した結果とも考えられる。この点でも土器は当時の諸状況に敏感に反応しており，従って，土器文化の研究を通しても，当時の社会相を復原できることが改めて証明された。

鉄器類は，木槨墓から，鉄刀・鉄鉾・鉄鏃・刀子などの各種武器類，鉄斧・鉄鎌・鉄鉋などの各種農工具類を始めとし，鉄鋌，有刺利器，木槨，木棺用鋲など，比較的多量に出土し，石室墓からも環頭大刀・鉄鏃・鉄鉾・鋲などが出土した。

このうち，特に注目される遺物は台形木槨墓である2号墳出土の鉄鋌で，今日まで発見された鉄鋌中，年代がさらに遡るものである。鉄鋌は，現在までの調査例から観て，5世紀以前に遡らないと考えられてきたが，今回の調査で4世紀末まで遡ることが明らかになた。鉄鋌とは各種鉄製品を作る素材で，時には貨幣の代用を果したものと考えられている。古代社会においては鉄と塩を掌握することが強者としての条件であるが，金海地域でこのように早い段階から鉄鋌が出土することは，この地方で鉄生産が盛んに行われていたとする，古代文献史料を裏付けているのみならず，4世紀代の金官伽倻国の経済力を窺わしめる資料である。さらに指摘したい点は，上記の木槨墓からは馬具類が出土しなかったことである。このことは，4世紀代までは朝鮮半島南部には乗馬の風習がなかったことを意味し，「三国史記」などの古代文献史料に対する真偽批判に有益な手懸りになると考えられる。

このほかの出土遺物としては，5基の石室墓から検出された細環式耳飾と，木槨墓から出土した水晶製勾玉・硬玉・切子玉などの装身具がある。この中で注目すべきは，硬度が増し，高等な加工技術を要する水晶製勾玉が3世紀後半代の木槨墓から出土した点で，これは，当時，本地域の加工技術が高水準に達していたことを示している。日本では水晶製勾玉は，5世紀中葉以降の古墳などから出土している。

4. 調査の所見

既述したように，今日まで我国の古墳の発掘調査は，外形上巨大な封土をもった高塚古墳，または年代的に相応する墳墓に主力を注いできた傾向がある。そのために高塚古墳が存在しない金海地域の古墳調査は自ずと軽んじられ，従って金海地域の古代文化の究明も迷宮に落ち入るかのように彷徨するほかなかった。当大学博物館では，こうした点を克服

し，進んで金官伽倻国の実態に迫るために，金海・七山洞古墳群の発掘に着手し，この調査で得た成果を極めて大きいと考えている。

まず第1に，竪穴式石室(慶州地方では積石木槨)を内部主体とする高塚古墳段階以前に，木槨墓が墓制の主流をなす段階が存したとする点を，今回の調査で改めて強調できよう。このことは，竪穴式石室墓が支石墓下部の石槨を継承・発展したと言う，漠然とした感情論で，紀元1世紀以降の伽倻地域の墓制が竪穴式石槨墓であったとする，学界一部の安易な研究態度は，現時点で払拭されなければならないことを意味している。従って金官伽倻の墓制は木槨墓であり，金官伽倻国の実態を明確にするためには木槨墓の重点的な発掘調査の必要性を痛感したことが，今調査の第1の成果であると考えられる。事実，今次の調査でも明らかになったように，4世紀末あるいは中葉以前に，本地域では典型的な竪穴式石室墓は存在しない。とすれば，木槨墓の墳丘が問題になるが，墳丘が存在したとすれば，筆者は，南部地方のこうした木槨墓が楽浪の木槨墓の影響力が強かったと考え，楽浪の木槨墓同様に，低平な方台形墳丘を有した方墳であったと推定する。このような低平な墳丘は消失しやすいため，木槨墓に墳丘が残存していない原因であったかも知れない。

第2に，今回の発掘調査を通じて痛感したのは，金官伽倻国は，その最盛期が4世紀代で，それ以後急激に衰退していくことである。それは，本地域の4世紀代の文化が高度に発達し，独創性を発揮しているのに反し，5世紀代になると，独自性は消失し，新羅的な要素が強く反映している点から理解できる。これに伴って，学界で百家争鳴状態にある伽倻連盟の覇権の推移問題についてであるが，金官伽倻国から高霊地域の大伽倻国へ覇権が移動する時期は，今回の発掘成果を通して，5世紀初めから前半期のある時点であると言う私見を提示しておこう。これは，昨今までの大伽倻地域での調査成果をみる限り，大伽倻国の独創的な文化が5世紀中葉に入ってから成立している点からも，充分に肯首できる。

そのほかに，今次の発掘調査結果から派生してくる多くの問題は，出土遺物の整理と分析を経て，より一層明確にできるであろうし，その調査成果と歴史的考察を報告書作成時に提示したいと思う。

引き続いて，当大学博物館では本古墳群に対する第2次調査を計画しており，今後さらに金官伽倻国の実態究明のためのより多くの資料と成果を上げるものと期待している。

(申　敬澈＝釜山産業大学校文科大学史学科専任講師)

(訳・松井忠春＝当センター調査第1課資料係主任調査員)

≪訳者付記≫　本報文は，学内報「釜山産大学報」第181・182号(1987年11月2日付)に掲載された，学内一般学生を対象にして草稿されたものではあるが，その主旨は，1987年11月7・8日に開催された第11回韓国考古学全国大会での発表要旨と内容を同じくしており，学術的意義を十二分に有していると考えられる。最後に，訳出を快諾して頂き，訳稿校閲の上，未報告写真まで送付賜わった，申敬澈先生に深謝致します。

資　料　紹　介

志高遺跡出土の大歳山式系統の土器について

三　好　博　喜

1. はじめに

直良信夫氏によって命名された「大歳山式土器」は，北白川下層式土器群に後続する，近畿の縄文時代末型式として位置づけられている。大歳山式土器の特徴は，口縁部や隆線上をΣ字状工具で加飾する，いわゆる特殊突帯文や底部の抉り込みなどにある。しかし，個体として把握された資料が少ないため，全体像については，未だ不明な点が多い土器型式でもある。(注1)

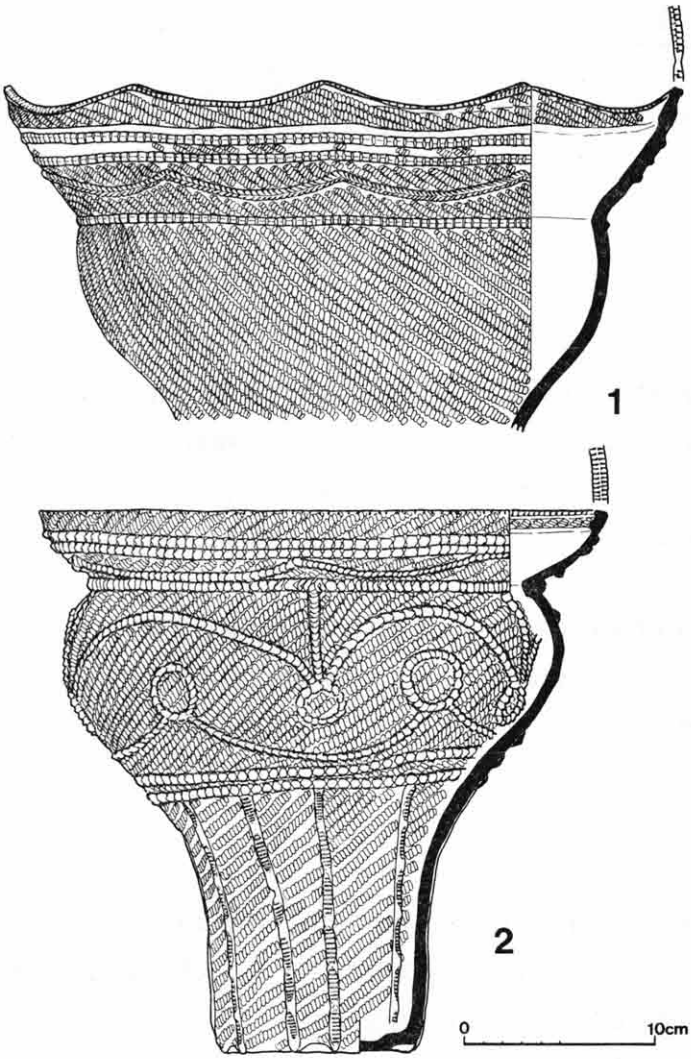
今回紹介する資料は，京都府舞鶴市志高遺跡の縄文時代遺物包含層の上層(注2)から出土した土器である。当該型式と考えられる資料のなかでは，器形や施文工具・施文手法，全体の文様構成などを比較的明瞭かつ総合的に知り得るもので，大歳山式土器を理解する上では重要な資料となろう。

2. 出土遺物

1は，口径約31cm・現存高約15cmを測る深鉢形土器である。器形はキャリパー形を呈する。RLの縄文を地文として，文様帯を口頸部に集約させている。文様の構成は，1単位8反復である。口縁は，波状口縁で，8個の波頂部をもつ。

口縁部内外面は，粘土紐を貼付して肥厚させ，縄文を施している。口縁部端面は，粘土紐で被覆し，内外からΣ字状工具を用いて刺突を加えている。口縁部下には2条，頸部屈折部には1条の隆線が巡っており，これらの隆線上には縦位の刻み目が加えられている。また，口縁部下隆線と頸部隆線との間には，8個の弧状隆線を貼付してΣ字状工具で加飾している。胴部は，縄文が全面に施されているだけで，他に施文はみられない。色調は，淡茶褐色が基調で，一部が黒褐色となっている。なお，口縁部には1対の補修孔がある。

2は，推定口径29cm・器高約29cm・底径約10cmを測る深鉢形土器である。器形は，キャリパー形を呈する。口縁は，平口縁である。LRの縄文を地文とし，器面を口頸部・胴部上半・胴部下半に3分割して文様帯を構成している。各文様帯は，1単位6反復を基本として描き出されているものと考えられる。



出土遺物

口縁端部は，内側に粘土紐を貼付し，内外からΣ字状工具で刺突している。口縁部は，内側を若干肥厚させて内外に縄文を施している。しかし，内面の縄文帯は，端部に貼付された粘土紐のため目立っていない。口縁部下から頸部屈折部までの文様構成は，1の文様構成の圧縮型といえる。異なる点は，弧状隆線が6個である点と隆線すべてがΣ字状工具で加飾されている点とにある。胴部は，屈曲部にΣ字状工具で加飾した2条の隆線を巡らし，胴部文様帯を2分割している。胴部上半には推定12個の環状隆線を配置している。環状隆線は，一つおきに上向きの弧状隆線で連繋し，頸部隆線からも隆線を垂下させて連結している。残る6個の環状隆線は，下向きの弧状隆線で連繋している。胴部上半に展開する各隆線は，Σ字状工具によって刺突が加えられている。胴部下半には，2本1単位6反復，12本の隆線を垂下し，隆線上には二枚貝の圧痕文を施している。底部側縁には，二枚貝の押圧による窪みを6か所に設けている。色調は，明赤褐色が基調である。

3. おわりに

近畿の縄文時代前期末型式の土器観は，施文工具や施文手法などを中心として唱えられてきた感がある。これは，偏に個体として認識できる資料が少なかったためであろう。志高遺跡出土の資料では，施文工具や施文手法に加えて，文様帯の構成にまである程度踏み込んだ土器観を展開できるものと考えている。おそらく2については，キャリパー形を呈する器形・口唇部の∑字状工具による刺突・特殊突帯文の複雑な展開・隆線上の二枚貝による圧痕文・底部側縁の貝殻押圧など，従来いわれている大歳山式土器の構成要素をほとんど網羅しており，大歳山式土器におけるひとつの完成された型としてみてよいものと思われる。これに対して1は，キャリパー形を呈し，口唇部に∑字状工具による刺突を加えてはいるものの，口頸部に文様帯が集約され，特殊突帯文の展開も単純で，刻み目突帯文という異なる要素が認められる。2を完成された型とみれば，1は未成熟型もしくは退化型としてとらえることができるかもしれない。ただし，大歳山式土器の細分については，施文工具や施文手法の差異などの点から，幾つかの指摘(注3)がなされており，総合的に考察してゆくべき問題である。

さらに，志高遺跡の縄文時代遺物包含層の上層からは，北白川下層Ⅲ式土器と考えられる土器群も多量に出土しており，今後の整理・分類作業によって，大歳山式土器と北白川下層Ⅲ式土器との文様構成の差異をより明確に認識できるものと期待している。

なお，浅学のため型式観については，先達の業績を無視した部分も多々あるものと思われる。多くの方々の御叱正と御教示とを請うところである。

(みよし・ひろき＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1　中村善則「播磨大歳山遺跡1—縄文土器—」(『神戸市立博物館研究紀要』第3号　神戸市立博物館)　1986

注2　三好博喜・肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区下層)」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注3　a．泉　拓良・網谷克彦「縄文土器」(『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会)　1980

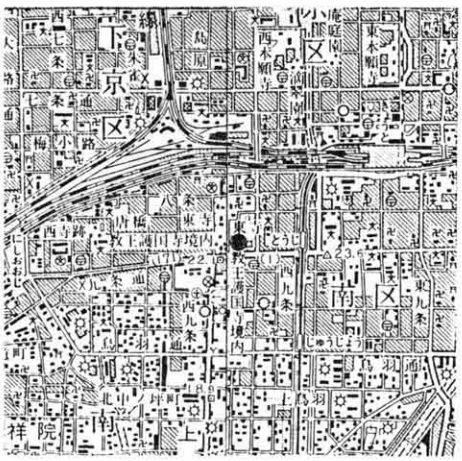
b．松井政信・古川　登「三方郡美浜町浄土寺遺跡出土の遺物について(その1)」(『福井考古学会誌』創刊号　福井考古学会)　1983

府下遺跡紹介

40. 東寺旧境内

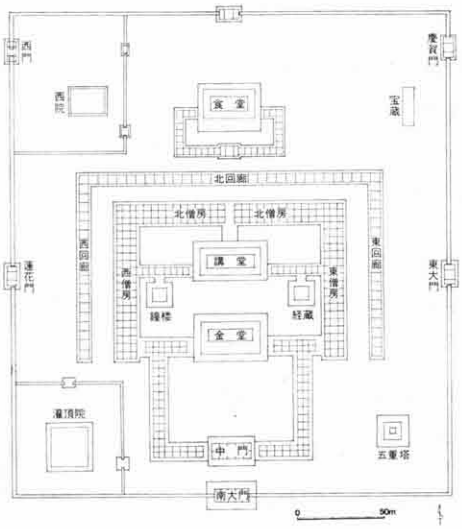
東寺は，正式には教王護国寺といい，京都市南区九条町に所在する。寺地については，平安遷都以来，その場所を変えていないが，堂宇はかなりの変動があった。

草創については，延暦13(794)年の平安遷都の直後にその造営が始まったといわれるが，詳しい史料がなく，はっきりとはわからない。確実な史料上の初見は，『日本後紀』延暦23(804)年4月壬子条に，「従五位下多治比眞人家繼爲造東寺次官，」とある任官記事である。しかし，『東大寺要録』巻六には，「東寺　右延暦十二年歳次癸酉，公家建立東西両寺，施入食封千戸」とあって，それ以前の状況を伝えている。ただ，延暦12年は，平安遷都以前のことであり，史料として年次にやや疑問が残る。また，『東宝記』巻一には，「東寺草創事　或記云，桓武天皇御宇，延暦十三年甲戌，平安遷都，同十五年丙子，以大納言伊勢人，爲造寺長官，建東西両寺(下略)，」とあり，『帝王編年記』にも同様の記載が見られるので，年次的にはこちらの方がうまく説明できそうである。しかし，延暦15年当時の大納言は、『公卿補任』などによれば，紀古佐美と神王の二人しか見えず，この記事全体が信用できるかどうか疑問が残る。ただ，『類聚国史』巻百七には，延暦16年四月条として「従五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人」の名前がみえる。つまり，延暦16年の段階ですでに「造西寺次官」が存在しているのである。東寺と西寺が左右両京にあって，朱雀大路を挟んで対称的に並ぶことから推定して，両寺の建立が同時期に始まったとすれば，延暦16年段階で工事が始まっていたとみることも可能である。あるいは，先の『東宝記』や『帝王編年記』の記事については，年次だけは信用すべきかもしれない。



第1図　遺跡所在地 (1/50,000)

このように，東寺の草創に関しては，史料がほとんど残存しないため，わからないことが多い。現在の時点では，東寺は，平安遷都のほぼ直後くらいから西寺とともに，その造営が始まったということ程度しか知



第2図　東寺伽藍配置復原図

りえない。また，いつ頃完成したかについても，よくわかっていないが，『日本後紀』弘仁3年9月癸丑条に，「官家功徳封物，停収東大寺，収東西寺諸司，出納充用之色，一依前例，」とあり，また，同年11月壬午条に，「贈四品布勢内親王墾田七百七十二町，施入東西二寺，」とあって，この弘仁3年に急速に東西二寺の経済的基盤が整備されている。しかも，翌4年正月癸酉条には，「於東西二寺始行坐夏，其布施供養准諸大寺例，」とあって，坐夏の行事も行われている。これらのことから，東寺は，弘仁3年ころにはほぼ，西寺とともに完成したのではないかとみられる。

寺地については，『帝王編年記』巻十二に，「東寺南北二町，（中略）東西二町，」とあり，また，四至が平安京の道によって表わされていることから，二町四方であったことが確認できる。これは，現在でも基本的には変化していない。

ところで，東寺が歴史上著名になる契機は，いわゆる弘仁14(823)年の空海への勅賜であろう。『東大寺要録』によれば，「以東寺永賜空海和尚，其後渉東大寺真言院廿一僧爲末寺，」とあり，空海が東寺を領したと記載されている。しかし，『類聚三代格』に所収されている弘仁14年10月10日官符によれば，「眞言宗僧五十人　右被右大臣宣偁，奉　勅，件宗僧等，自今以後，令住東寺，（中略）若僧有闕者，以受學一尊法有次第業僧補之，若無僧者，令傳法阿闍梨臨時度補之，道是密教，莫令他宗僧雑任，」とある。これは，真言宗僧50人が東寺に住むことになり，それ以外の宗派を禁じたことを示す奉勅官符にすぎず，空海が東寺を勅賜されたとはどこにも書いていない。ただ，この時点で真言宗の中心人物は空海であるので，空海は後の東寺長者のような立場にあって，東寺の経営に関与したことは認めてよかろう。事実，『東宝記』巻一の「講堂」のところに書かれている「東寺新定講堂圖」には，東寺と西寺の別当の名前が末尾に記されており，空海は東寺別当としてでてくるのである。また，承和元年12月24日官符では，空海の表が載せられており，そこに，「其三綱者，擇五十僧内充用」とあって，三綱（各寺院で経営にあたった僧侶）には先の弘仁14年に設置された真言宗僧50人のうちから選ぶことを述べている。この請願は認められ，結局，空海は，東寺の経営にあたって，東寺を真言宗の拠点にしようとしたことになる。

しかし，この事実をもって，ただちに東寺が空海に勅賜されたとみることはできない。むしろ，『東大寺要録』の記述は，空海が東寺の経営に積極的に関与した事実から，弘法大師信仰がさかんになった頃のものとみた方がよさそうである。

空海が東寺の経営に関与するようになって以後，東寺は真言密教の一大道場となった。なかでも，灌頂院は，空海の弟子の実恵の時に竣工したと伝えられている。現在でも，東寺には平安時代の前・中期の仏具や仏画などが多く，いずれも真言密教的な色彩の強いものである。これらのものが伝世するのは，真言宗で国家的な修法が行われるときは東寺で挙行されたことに起因するからであろう。

このように，平安時代の前・中期に栄えた東寺であるが，平安時代も末になると，次第に衰退していったようである。平安時代末から鎌倉時代初期には，源頼朝や後白河法皇の意を受けた文覚が復興に乗り出す。文覚は，後白河法皇に働きかけて，文治5(1189)年に知行国である播磨国を東寺の修理財源に充てて，修理事業を始めた。その後，頼朝の死によって一時中断するが，嘉禎～暦仁頃には再び造修理所として肥後国や丹後国があてられており，経済的にも宣揚門院覲子内親王(後白河の皇女)が伊予国弓削島荘や大和国平野殿荘などの荘園を寄進し，一躍拡大するようになった。

南北朝から室町時代には，時の政権と密接な関係を持つに至っている。後醍醐天皇は，元弘の変の際，まず東寺に入っているし，足利尊氏も東寺において陣を張り，光厳上皇の御所を灌頂院に求めている。また，足利義満も東寺の修造料所として，永和3(1377)年に山城国東西九条女御田地頭職を充てている。以後，歴代将軍によって東寺は，保護を得ただけでなく，東寺長者は，俗界のことにも大きな影響力を持つようになった。

そのため，室町幕府の権威が失墜していくと，たびたび土一揆などにみまわれ，室町時代末期には幾度かの火災にあって荒廃した。なかでも，文明18(1486)年の大火によって伽藍は大きく焼け，往時の姿を失った。

織田信長や豊臣秀吉は，京都に入ると東寺を保護し，五重塔などの復旧に力をかした。また，秀吉の死後も，秀頼による金堂の再建などもあり，東寺は安定期に入った。江戸時代には，寺領として2,030石を有し，二度の五重塔の復旧，灌頂院の再建などが行われるなど，幕府は，先の時代以上に東寺に対して手厚く保護した。

明治になって，南大門が消失しただけでなく，神仏分離令や諸特権の喪失など，保護者が消えて，一時衰えるかに見えた。しかし，明治13(1880)年に東寺が真言宗の総本山に定められてからは，参拝客も増加し，毎月の空海御影供には多くの市民が集まるようになった。こうして，一般市民が東寺の財政を支えるようになり，現在でも一般に著名な寺院で，親しまれるようになったのである。

以上のような，歴史的経過を経た東寺であるが，文化財保護のために行われた防災工事に伴って，1977年12月から1981年３月にかけて，比較的広い範囲にわたって発掘調査が実施された。調査は，現東寺境内の各所で行われたが，その結果をみても，方二町の範囲は，創建当初からのものと考えられている。また，建物の配置も，かつてあったところに再建されているので，位置については問題にならなかったものの，しかし，南大門や中門，三面僧坊，鐘楼，経蔵，食堂については，すでに存在しないため，古図からの類推にとどまったようである。

東寺伽藍の中軸線は，真北に対して西へ23分１秒振れているが，西寺の伽藍中軸線と平行するという結果をえている。このことから，東寺と西寺は，同時に同一の基準で造営されたことが明らかになった。

出土遺物は，土器類と瓦が大半であり，東寺が存続する現代に至るまでの各時代の遺物が見つかっている。なかでも，講堂の周辺では，緑釉瓦が採集されており，天長２(825)年に建立された講堂で緑釉瓦が使用されたことが判明している。また，注目すべき遺物として,「左寺」と刻印された平瓦がある。これは，東寺が左京にあったことから，左寺とか左大寺と呼ばれたので，そのように刻印したのであろう。

東寺は，現在でも「弘法さん」の名で知られ，毎月21日には出店なども開かれて，賑わいを見せている。また，東寺の五重塔は，江戸時代の寛永21(1635)年に竣工したものであるが，現存するもののなかでは，約55ｍと最も高い。国宝に指定されている。

（土橋　　誠）

参考文献

朝日新聞社編『東寺』
『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告』 教王護国寺
大岡　実「貞観時代における興福寺式伽藍配置」『南都七大寺の研究』所収
後藤柴三郎「東寺の古建築」『仏教芸術』 47
網野善彦『中世東寺と東寺領庄園』

長岡京跡調査だより

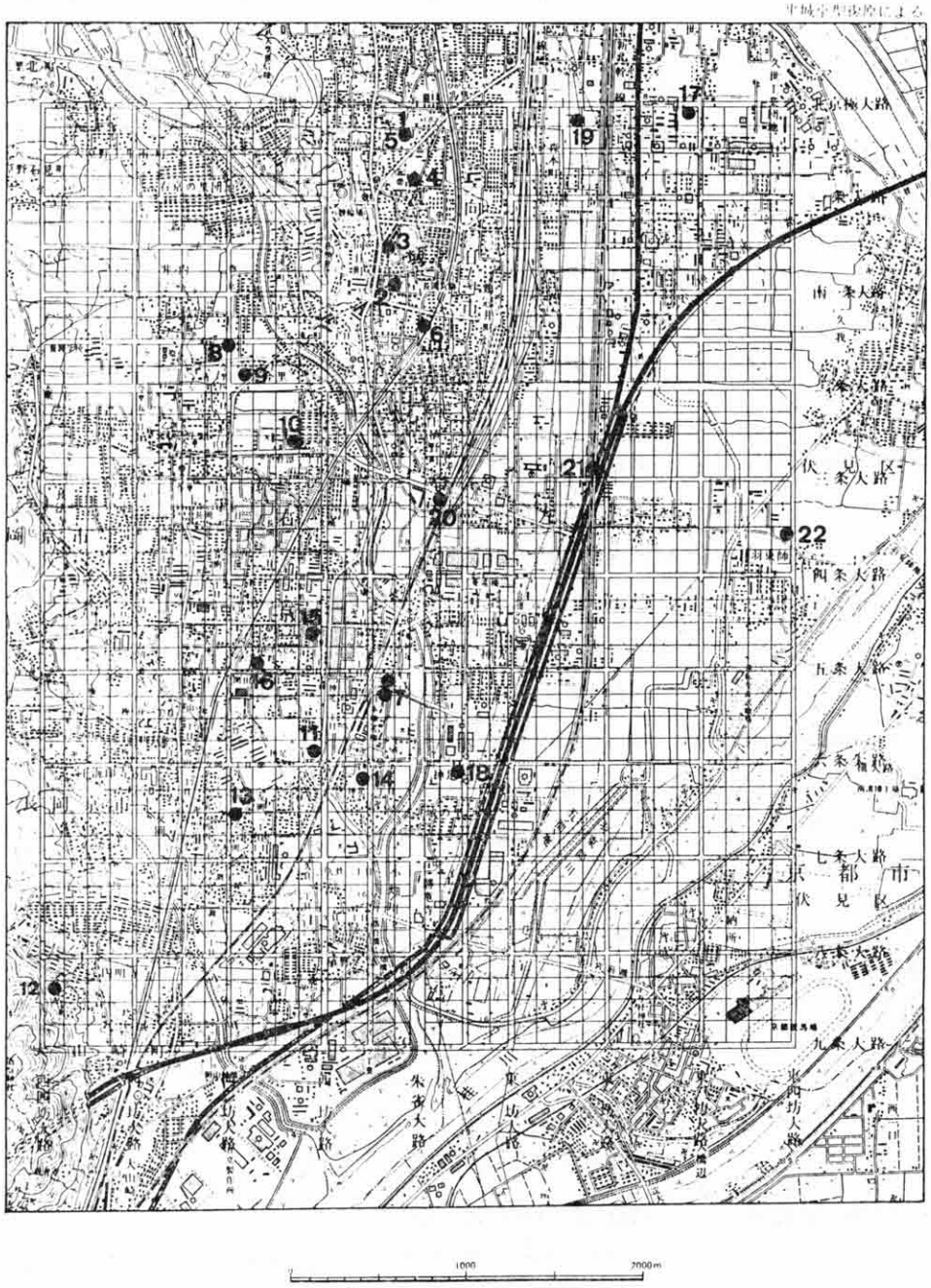
今年度から，本調査だよりの内容を１か月早め，今号には昭和63年３月から４月にかけて行われた長岡京跡に関する発掘調査の成果をとりまとめて報告する。３月23日と４月27日の長岡京連絡協議会で報告のあった調査は，下表に示すとおり，宮域６件，右京域10件，左京域６件を数える。このうち，主なものいくつかについて，以下に概要を述べる。

調査地一覧表　（昭和63年４月末現在）

番号	次数	地区名	所在地	調査機関	調査期間
1	宮内第204次	7AN11J	向日市寺戸町殿長11	向日市教委	63. 2.22～ 3.24
2	宮内第205次	7AN14Q	向日市鶏冠井町大極殿73-1	(財)京都府埋セ	63. 2.12～ 3.15 63. 4.11～
3	宮内第206次	7AN13J	向日市寺戸町東ノ段4・5・6	向日市教委	63. 3.10～ 4.20
4	宮内第207次	7AN12H	向日市寺戸町西野辺26-2	(財)向日市埋文	63. 4. 1～ 4.11
5	宮内第208次	7AN11K	向日市寺戸町殿長８	(財)向日市埋文	63. 4.18～
6	宮内第209次	7AN9Q	向日市鶏冠井町山畑21-1	(財)向日市埋文	63. 4.21～
7	右京第279次	7AN MWY-3 MTT-4	長岡京市東神足一丁目	(財)長岡京市埋	62.10.27～ 63. 3.31
8	右京第285次	7ANIFC	長岡京市今里更ノ町29・30	(財)京都府埋セ	62.10.12～ 63. 3. 5
9	右京第295次	7ANIAC-2	長岡京市今里畦町16-6	(財)長岡京市埋	63. 2.22～ 4. 7
10	右京第296次	7ANISB-3	長岡京市今里三ノ坪4-1	(財)長岡京市埋	63. 3. 6～
11	右京第297次	7ANMMK-4	長岡京市神足三丁目220-1	(財)長岡京市埋	63. 3.14～
12	右京第298次	7ANSKU	大山崎町円明寺北浦24-1他	大山崎町教	63. 3.22～ 4. 2
13	右京第299次	7ANNHR-2	長岡京市友岡一丁目308-1他	(財)長岡京市埋	63. 3.25～ 4.12
14	右京第300次	7ANQSC	長岡京市勝竜寺城ノ内	(財)長岡京市埋	63. 4.26～
15	右京第301次	7ANKTR-4	長岡京市開田二丁目120	(財)長岡京市埋	63. 4.14～
16	右京第302次	7ANKUT-5	長岡京市開田三丁目6-2	(財)長岡京市埋	63. 4.15～
17	左京第187次	7ANVUC	京都市南区大藪町	(財)京都市埋文	63. 1.22～ 3. 8
18	左京第188次	7ANMKC-2	長岡京市神足木寺町15-1	(財)長岡京市埋	63. 3. 4～ 3.15
19	左京第189次	7ANDTS	向日市森本町竹図子10	向日市教委	63. 3. 7～ 3.15
20	左京第190次	7ANFKN	向日市上植野町角前11-1	向日市教委	63. 3.14～ 3.28
21	左京第191次	7ANFST-3	向日市上植野町芝ノ本	(財)向日市埋文	63. 4.15～ 4.22
22	左京第192次	7ANXTH	京都市伏見区羽束師清水町	(財)京都市埋文	63. 4. 1～

長岡京条坊復原図

平城宮朝堂院による



数字は本文（　）内と対応

宮内第204次（1）　向日市教育委員会

調査地は，宮内の北辺官衙地区にあたるとともに，殿長遺跡の範囲内にも相当している。長岡京跡関係の遺構としては，東西溝2，掘立柱建物跡1，塀跡1などがある。東西溝（SD11711・SD20405）は，調査区の北端近くで検出されたもので，宮内道路の南側溝になるものと思われる。殿長遺跡関係の遺構としては，南北2間，東西2間以上の掘立柱建物跡（SB20410）と南北2間以上，東西4間以上の掘立柱建物跡（SB20407）とがある。年代は前者が古墳後期，後者が平安前期にそれぞれ属する。

出土遺物には，長岡京期の瓦・土師器・須恵器・緑釉陶器のほか，平安前期の瓦・緑釉陶器（香炉蓋ほか）・灰釉陶器などがある。

宮内第206次（3）　向日市教育委員会

朝堂院北西官衙地区で行われた発掘調査である。長岡京関係では，宮内道路の南側溝と思われる東西溝（SD20620）と南北方向の塀跡（SA20600）とがある。東西溝は，幅約3m・深さ0.7mのしっかりしたものである。このほか，近世以降現代に至る各時代に掘られた大小の掘り穴多数が検出されている。

右京第296次（10）　（財）長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京右京四条二坊六町推定地において実施された発掘である。長岡京期の掘立柱建物跡5棟のほか，溝・自然流路などが確認されている。

「夫」・「専三」・「得」などと書かれた墨書土器も出土している。

右京第297次（11）　（財）長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京右京六条二坊四町推定地で行われた発掘調査である。犬川の旧河道にあたり，人為的な遺構は検出されなかったが，人面墨書土器，墨書土器，円面硯，宝珠硯などの長岡京期の遺物多数が包含層から出土している。

右京第301次（15）　（財）長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京右京五条二坊三町推定地で行われた発掘調査である。掘立柱建物跡，土坑，溝などの長岡京期の遺構が見いだされた。

右京第302次（16）　（財）長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，長岡京跡右京五条二坊十二町にあたるとともに，開

田遺跡の範囲内にも該当している。

長岡京期の溝・土坑，平安時代から中世にかけての溝・土坑などの遺構が検出されている。

左京第188次（18）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京左京七条一坊八町推定地で行われた発掘調査である。小畑川の氾濫に伴う堆積層と長岡京期の遺物包含層が検出された。

左京第189次（19）　向日市教育委員会

長岡京左京一条二坊九町推定地で行われた発掘調査である。縄文晩期の土坑，弥生～古墳前期にかけての旧河道，古墳後期の溝などの遺構が見いだされたが，長岡京跡に関係する遺構は未検出である。

（奥村清一郎）

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

（昭和63年４月18日現在）

理事長

福山　敏男　（京都府文化財保護審議会委員）

副理事長

樋口　隆康　（京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授）

理　事

中沢　圭二　（京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授）

川上　　貢　（京都府文化財保護審議会委員 福井大学工学部教授）

上田　正昭　（京都府文化財保護審議会委員 京都大学教養部教授）

藤井　　学　（京都府立大学文学部教授）

足利　健亮　（京都大学教養部教授）

佐原　　真　（奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター研究指導部長）

原口　正三　（大阪府立島上高等学校教諭）

藤田　价浩　（西芳寺貫主）

小嶋　一夫　（京都府文化芸術室長）

上田　　将　（京都府教育庁指導部長）

堤　圭三郎　（京都府教育庁文化財保護課長）

荒木昭太郎　（常務理事・事務局長）

監　事

堂端　明雄　（京都府出納局長）

奥村　幸一　（京都府監査委員事務局長）

事務局長　荒木昭太郎

事務局次長　中谷　雅治

総務課

課　長　田中　秀明

総務係長　安田　正人

主　事　冨田　敦子　杉江　昌乃

〃　今村　正寿　林　淳次

調査員　橋本　清一

調査第１課

課　長　中谷　雅治（次長兼務）

企画係長　奥村清一郎

調査員　濱田　延充

嘱　託　長関　和男

資料係長　奥村清一郎（企画係長兼務）

主任調査員　松井　忠春

調査員　田中　　彰　土橋　　誠

調査第２課

課　長　杉原　和雄

調査第１係長　辻本　和美

調査員　増田　孝彦　荒川　　史

〃　肥後　弘幸　細川　康晴

〃　森　　正　中川　和哉

〃　森島　康雄

調査第２係長　水谷　寿克

主任調査員　引原　茂治

調査員　竹原　一彦　黒坪　一樹

〃　岡崎　研一　田代　　弘

〃　小池　　寛　鍋田　　勇

〃　鵜島　三寿

調査第３係長　小山　雅人

主任調査員　戸原　和人　石井　清司

調査員　竹井　治雄　石尾　政信

〃　伊野　近富　岩松　　保

〃　三好　博喜　伊賀　高弘

センターの動向（63. 3～4）

1. できごと

3. 5　長岡京跡右京第285次（長岡京市）発掘調査終了（11. 12～）

菩提遺跡（木津町）発掘調査終了（2. 19～）

3.10　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（長岡京市）出席（中谷次長・田中総務課長・杉原調査第2課長）

千代川遺跡（亀岡市）発掘調査終了（5. 18～）

3.11　円山城館跡（私市円山古墳一綾部市）発掘調査終了（11. 19～）

三宅4号墳（綾部市）発掘調査終了（1. 10～）

三宅遺跡（綾部市）発掘調査終了（5. 7～）

福垣城館跡（綾部市）発掘調査終了（1. 18～）

以久田野古墳状隆起（福垣北古墳一綾部市）発掘調査終了（11. 4～）

3.14　平安京跡（京都市一第2行政棟）発掘調査終了（1. 5～）

3.17　昭和63年度職員（調査員）採用試験実施

3.23　長岡京連絡協議会開催

3.29　第21回役員会・理事会開催一於・平安会館一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，中沢圭二・川上 貢・藤井 学・足利健亮・藤田价浩・上田　将・堤圭三郎の各理事，谷　利夫・堂端明雄の各監事，荒木昭太郎常務理事出席

3.31　退職職員辞令交付（別掲）

4. 1　新規採用職員辞令交付式（別掲）

人事異動（別掲）

4. 6　平安京跡発掘調査再開

4. 8　全国埋蔵文化財法人連絡協議会「日本列島発掘展」近畿ブロック企画実行委員会（滋賀県・奈良県・京都府部会）開催（於・当調査研究センター）

4.11　私市円山古墳発掘調査再開

長岡宮跡第205次（向日市）発掘調査再開

4.12　桑飼上遺跡（舞鶴市）発掘調査再開

4.17　退職職員辞令交付（別掲）

4.18　人事異動（別掲）

福垣北古墳群（綾部市）発掘調査開始

4.19　アバ田東古墳（久美浜町）発掘調査開始

スクモ塚古墳群（峰山町）発掘調査開始

千代川遺跡発掘調査再開

4.21　三宅遺跡発掘調査再開

アサバラ遺跡（久美浜町）発掘調査再開

鳥取城跡（久美浜町）発掘調査再開

瓦谷遺跡（木津町）発掘調査再開

4.22　全国埋蔵文化財法人連絡協議会「日本列島発掘展」近畿ブロック（滋賀県・奈良県・京都府）企画実行委員会開催（於・当調査研究センター）

4.27　長岡京連絡協議会開催

2. 人事異動

3.30　林　淳次嘱託退職

3.31　鵜島三寿調査員退職

森下　衛調査員退職（京都府教育庁文化財保護課技師に復職）

4. 1　中川和哉調査員・森島康雄調査員・濱田延充調査員採用

鵜島三寿，調査第2課調査員，林淳次，総務課主事採用（京都府教育庁から派遣）

石井清司，主任調査員に昇任

4.17　谷　利夫監事退任

山口　博調査第1課企画係長兼資料係長退職（京都府教育庁文化財保護課技師に復職）

4.18　奥村幸一監事新任

奥村清一郎，調査第1課企画係長兼資料係長採用（京都府教育庁から派遣）

受贈図書一覧（63. 3～63. 4）

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第17・19集，清水山遺跡 群馬県立渡良瀬養護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15 宮久保遺跡Ⅱ，新吉田町四ツ家横穴墓群，泥牛庵脇やぐら群 Ⅱ
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財センター紀要 1
(財)滋賀県文化財保護協会	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 Ⅵ-3，同 Ⅶ-4，同 Ⅷ-4，同 Ⅳ-3，尾上遺跡発掘調査報告書 ―東浅井郡湖北町所在―
(財)大阪文化財センター	福田遺跡(その1)，小阪遺跡(その2)，同（その4），太井遺跡(その1)，同（その2），同（その3），丹上遺跡(その4，6)，亀井(その3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，亀井北(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，同（その3），新家(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，久宝寺南(その2)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，久宝寺北(その1～3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，城山(その2)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，同(その3)
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所学報 第45冊 薬師寺発掘調査報告，JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY OF JAPANESE ARCHAEOLOGY 日本考古学用語英訳辞典≪稿本≫
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1985 草戸千軒町遺跡―第34次発掘調査概要―，福山城西三之丸跡発掘調査概報，調査研究ニュース草戸千軒 第14巻
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第6号 昭和61(1986)年度
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財報告書 第21～23集
いわき市教育委員会	いわき市埋蔵文化財調査報告 第17～18冊
市原市教育委員会	昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書
木更津市教育委員会	千葉県木更津市 丹過遺跡確認調査報告書，千葉県木更津市 請西遺跡群発掘調査報告書―大山台古墳群第28号墳―
東京都北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告書 第2集
大島町教育委員会	大島町野増遺跡・下高洞遺跡D地区・和泉浜C地点遺跡

神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告 30
	神奈川県埋蔵文化財調査報告書 第47集
加賀市教育委員会	吸坂丸山古墳群
野々市町教育委員会	史跡御経塚遺跡―保存整備報告―
名古屋市教育委員会	名古屋市文化財調査報告 XX 熱田区夜寒町・高蔵遺跡発掘調査報告書
常滑市教育委員会	常滑市文化財調査報告 第16集 上白田古窯址群
米原町教育委員会	米原町埋蔵文化財調査報告書 Ⅶ 米原町内遺跡分布調査報告書
大阪府教育委員会	萱振遺跡発掘調査概要Ⅱ ―八尾市緑ケ丘2丁目所在―，府道貝塚中央線 森B遺跡発掘調査概要Ⅱ ―貝塚市森所在―，甲田南遺跡発掘調査概要Ⅴ――般国道309号線建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査―，大阪府立錦織公園内古墳群発掘調査概要，大塚西遺跡発掘調査概要，昭和60年度向泉寺跡発掘調査概要，府立泉陽高等学校校舎増築に伴う堺環濠都市遺跡発掘調査概要 Ⅰ，河南西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要 Ⅳ，大和川・今池遺跡発掘調査概要Ⅲ ―大和川下流域下水道今池処理場建設に伴う―，新家・西板持遺跡発掘調査概要 ―国道309号線予定地内の埋蔵文化財発掘調査―，稲葉遺跡発掘調査概要 Ⅰ ―府立玉川高等学校建設工事に伴う調査―，大里遺跡発掘調査概要 Ⅲ，志紀遺跡発掘調査概要 Ⅲ ―府営志紀住宅建替に伴う調査―，長峯地区府営ほ場整備に伴う長峯丘陵遺跡発掘調査概要 Ⅱ ―堺市富蔵所在―，八尾市福万寺所在池島遺跡発掘調査概要 Ⅱ，神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要 Ⅱ ―東大阪市東石切町・西石切町所在―，津堂遺跡 ―86-1区の調査―，長峰地区府営圃場整備事業に伴なう長峰丘陵遺跡発掘調査概要 Ⅲ ―堺市富蔵所在―，河南西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要 Ⅴ，昭和61年度 三軒屋遺跡発掘調査概要，府中遺跡発掘調査概要 Ⅱ，大津道遺跡発掘調査概要 ―松原市南新町所在―，中筋遺跡発掘調査概要 Ⅵ，南花田遺跡発掘調査概要 Ⅱ，淡輪遺跡発掘調査概要報告書 Ⅷ，池尻城跡発掘調査概要 ―狭山町池尻所在―，恩知遺跡発掘調査概要 ―八尾市柏村所在―，湯屋の下遺跡，石ナ町遺跡発掘調査概要，石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要 Ⅱ，八ケ岡遺跡発掘調査概要，小阪合遺跡発掘調査概要報告書，柏原・八尾幹線管渠築造工事に伴う発掘調査，大水川改修にともなう発掘調査概要 Ⅳ 古室遺跡Ⅱ，成法寺遺跡発掘調査概要 Ⅱ ―八尾市南本町所在―，大阪府藤井寺市所在 はさみ山土師の里遺跡他発掘調査概要 昭和61年度 河西西部地区農地開発事業に伴う

	寛弘寺遺跡発掘調査概要 Ⅵ
大阪市教育委員会	昭和58年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書，昭和59年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書，昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書，史跡難波宮跡 ―環境整備事業報告書(4)―，大阪市文化財年報 創刊号
東大阪市教育委員会	東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要 29
堺市教育委員会	堺市文化財調査報告 第21～23・25～28・30～31・35～36集，昭和60年度 国庫補助事業発掘調査報告 四ツ池遺跡，昭和61年度 国庫補助事業発掘調査報告 堺環濠都市遺跡発掘調査報告書
明石市教育委員会	明石市域の遺跡詳細分布調査(1)―1984・1985年度の調査―
川西市教育委員会	川西市加茂遺跡第81～83・85～91次発掘調査報告書
三田市教育委員会	兵庫県三田市文化財調査報告 第5冊
日南町教育委員会	福栄2号墳発掘 調査報告書 町道中野神戸線の修繕工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
備前市教育委員会	亀井戸遺跡発掘調査報告書，備前市埋蔵文化財調査報告 4，船山遺跡発掘調査報告
敷島町教育委員会	天狗沢瓦窯跡発掘調査概要
香川県教育委員会	高松城東ノ丸跡発掘調査報告書
玖珠町教育委員会	小田遺跡群 Ⅰ
田野町教育委員会	田野町文化財調査報告書 第3～5集
須賀川市立博物館	首藤保之助(阿武隈考古館)考古資料 採集記録(第3号)
埼玉県立さきたま資料館	'88さいたま博覧会協賛特別展図録「はにわ人の世界」
芝山はにわ博物館	パリはにわ展日本語パンフレット
流山市立博物館	学校教材用 資料目録 第7集
板橋区立郷土資料館	板橋区立郷土資料館紀要 第7号1987年度版，新河岸三丁目 早瀬前遺跡
調布市郷土博物館	調布の伝説
(財)出光美術館	出光美術館館報 第60号
(財)佐渡博物館	佐渡博物館研究報告 第9集
名古屋市博物館	考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ
名古屋市見晴台考古資料館	中区栄二丁目白川公園所在 白川公園遺跡第2次発掘調査概要報告書，見晴台遺跡第25次発掘調査の記録，見晴台教室'87
東大阪市立郷土博物館	大昔の人びとと資源
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	古墳を科学する 飛鳥資料館図録 第19冊

和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第14号
徳島県博物館	徳島県博物館紀要 第15・18集
佐賀県立九州陶磁文化館	肥前地区古窯跡調査報告書 第5集
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学論―歴史学・地理学― 第19号
早稲田大学考古学会	古代 第85号
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館館報 №3
日本大学史学会	史叢 第40号
國學院大學考古学研究室	あざみ野遺跡
國學院大學考古学資料館	國學院大學考古学資料館要覧 1987，國學院大學考古学資料館紀要 第4輯
愛知学院大学文学会	愛知学院大学文学部紀要 第17号
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館報告書 第16～17冊
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 鹿田遺跡Ⅰ
国立国会図書館	日本全国書誌 第1,631・1,636号
都立府中高等学校遺跡調査会	武蔵国分寺跡南方地区発掘調査報告書
東京都住宅局根ノ上遺跡発掘調査会	根ノ上遺跡発掘調査報告書
㈱名著出版	歴史手帖 第174～175号
鎌倉考古学研究所	鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告 Ⅱ，神奈川県・鎌倉市御成町228番―2他地点遺跡
愛知考古学談話会	弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題 Ⅰ，同 Ⅱ
大鳳寺跡発掘調査会	大鳳寺跡第2次発掘調査報告書
(財)古代學協會	古代文化 第350～351号
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要 Ⅵ
帝塚山考古学研究所	歴史考古学を考える 1，縄文文化研究部会紀要 1，考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
朝鮮学会	朝鮮学報 第126輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第26号
国立中央博物館	松菊里 Ⅲ
嶺南大學校博物館	嶺南大學校博物館學術調査報告 第8冊
(財)京都市埋蔵文化財研究所	昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要
京都市文化観光局文化財保護課	京都市の文化財，京都市文化財ブックス 第3集

向日市	向日市史 史料編
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第18集
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史資料篇 第6集
加茂町教育委員会	銭司遺跡(加茂町文化財調査報告 第1集)
加悦町教育委員会	須代遺跡第一次発掘調査概要
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館報 第8号(1987)
向日市文化資料館	向日市文化資料館報 第3号
京都教育大学考古学研究会(元紫郊史学会)	史想 第21号
佛教大学図書館	鷹陵史学 第13号
京都橘女子大学図書館	橘女子大学研究紀要 第14号(1987)
口丹波史談会	口丹波史料(三)千年山集二
小泉信吾	『囲碁・将棋文化史—その伝来から近代まで—』展示会目録
佐原真	飲食史林 第7号
福山敏男	季刊大林 №27 特集 IZUMO 出雲，高松塚行幸記，開館十五周年記念特別展 観音信仰と社寺参詣 —丹波・丹後—，展示図録5『山城国一揆とその時代』
藤原秀樹	武生市埋蔵文化財調査報告 Ⅳ
水野正好	奈良大学平城京発掘調査報告書 第1集

—編集後記—

新年度を迎え，ようやく一段落のつく頃になりましたが，情報28号が完成しましたのでお届けします。

本号は，昭和63年度のはじめの号なので，本年度の調査予定と昨年度の主要な調査成果をまとめたものを掲載しました。資料紹介では，前号に続いて志高遺跡出土の縄文土器について紹介されています。また，昨年度調査されたなかで，大きな成果をおさめた私市円山経塚について，概要を報告しています。本号は，当調査研究センターで行った事業の紹介が中心ですが，よろしく御味読下さい。

なお，御返送いただきました受領書には，内容に関する御意見・御感想等もあり，たいへんありがたく存じ上げます。今後も当センターへの通信欄として御活用いただければ幸いに存じます。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第28号

昭和63年6月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）